

鳥取県米子市

いし い よう がい あと
石 井 要 害 跡 Ⅲ

2020. 3

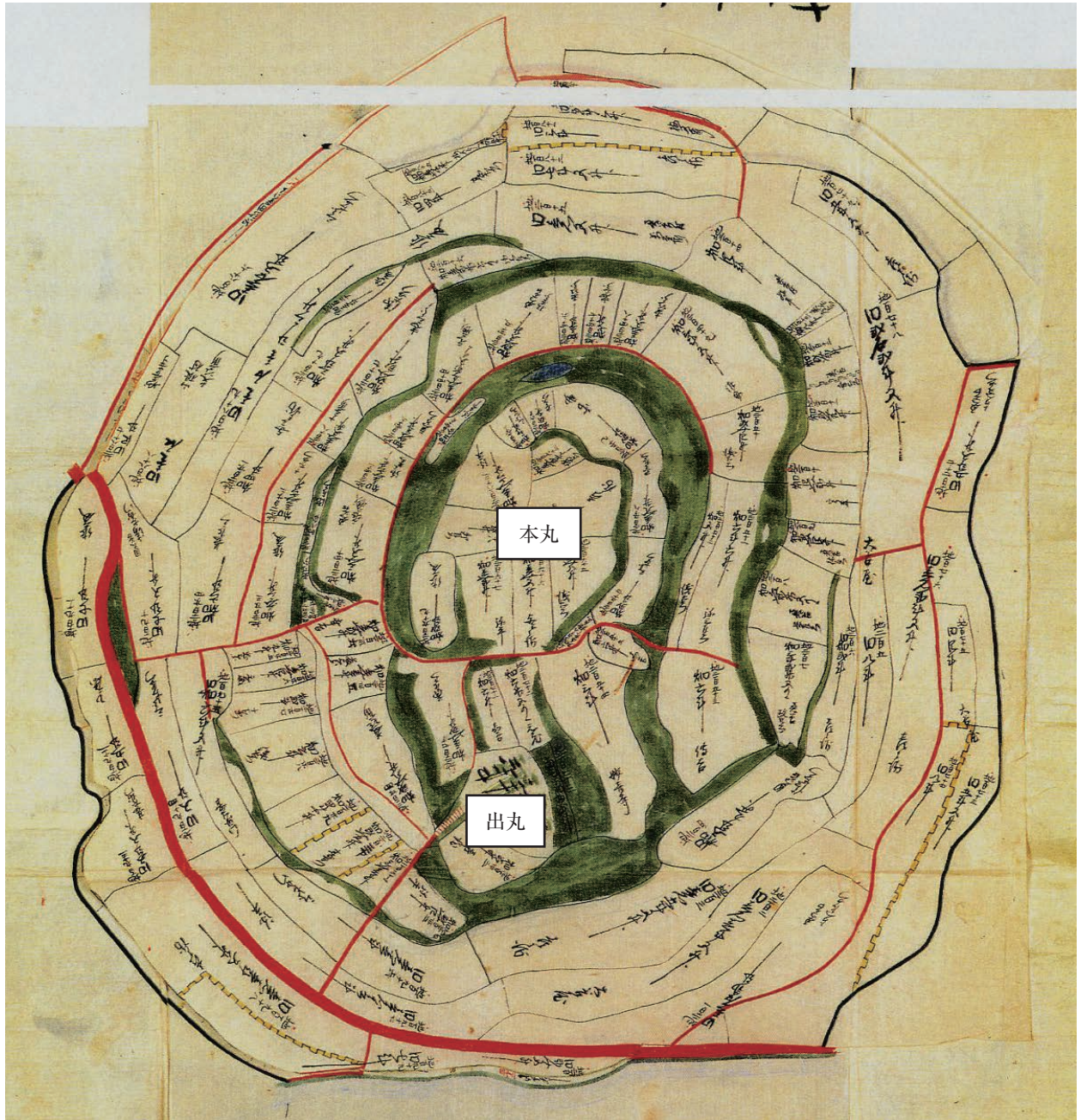
一般財団法人 米子市文化財団

鳥取県米子市

いし い よう がい あと
石 井 要 害 跡 III

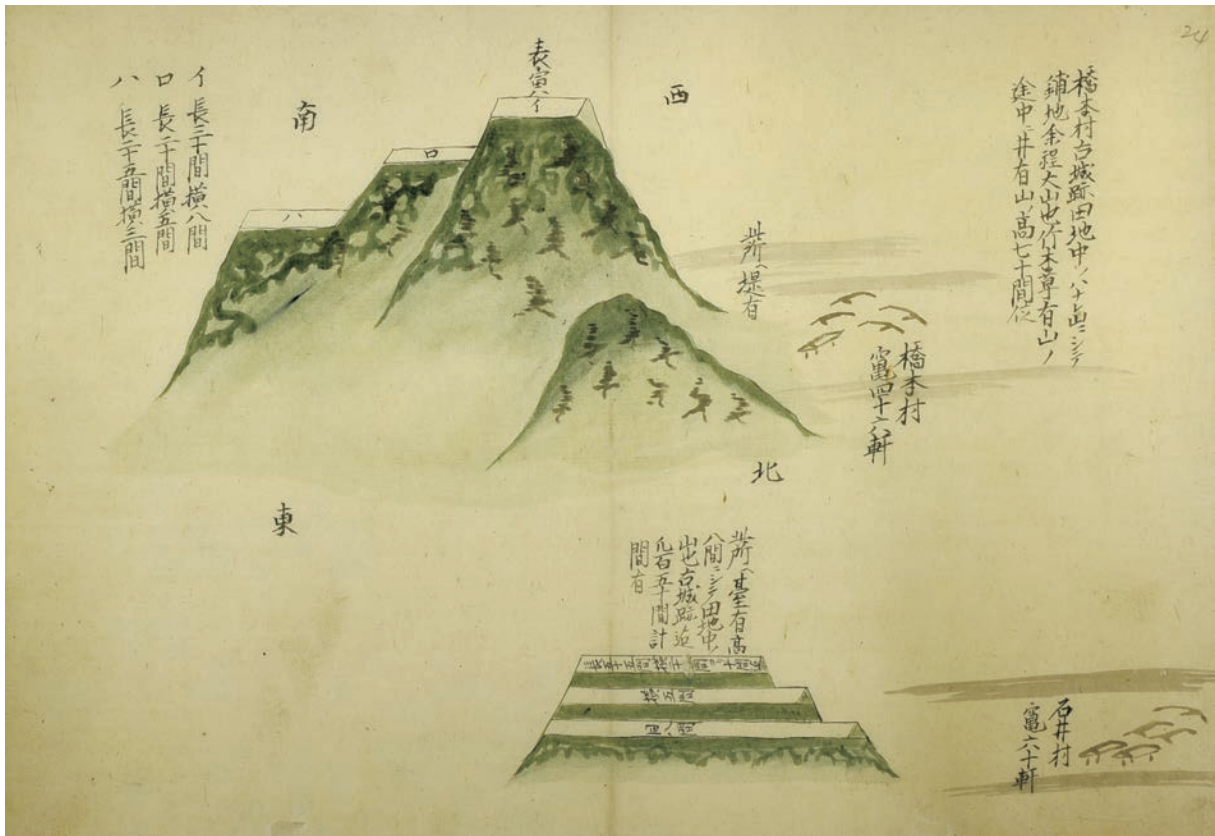
2020. 3

一般財団法人 米子市文化財団



石井村田畑地続字限絵図・字要害 (明治2年)

米子市立山陰歴史館所蔵



石井村・橋本村古城跡（『因伯古城跡図志』）

鳥取県立博物館所蔵



石井要害跡全景（西から）

序

当財団では、令和元年度に米子市の委託を受け、石井地区急傾斜地（石井要害公園区域）崩壊防止工事に伴い中世城館の石井要害跡の発掘調査（第3次調査）を実施しました。

調査の結果、北東側斜面の腰郭で掘立柱建物跡と銭貨を埋納した地鎮的な性格を有すると考えられる遺構が見つかるなど、新しい知見を得ることができ、さらに石井要害跡の様相が明らかとなってきました。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『石井要害跡Ⅲ』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました米子市都市整備部道路整備課ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和2年3月

一般財団法人 米子市文化財団
理事長 杉原 弘一郎

例 言

1. 本報告書は、米子市が計画する石井地区急傾斜地（石井要害公園区域）崩壊防止工事に伴い、令和元年度に米子市石井地内で実施した石井要害跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、米子市の委託を受けて一般財団法人 米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Yの数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「米子」、米子市作成の1/2500「米子市都市計画図」、及び鳥取県西部総合事務所米子県土整備局作成の1/500「石井地区急傾斜地崩壊防止工事平面図」を加筆して使用した。
5. 出土遺物を整理、評価するにあたり、備前焼については、丸亀市教育部総務課文化財保護室 乗岡 実氏、銭貨及び石製品の石材鑑定については、鳥取県地域づくり推進部文化財局文化財課 高橋章司氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
6. 本発掘調査における調査後空中写真撮影は業者に委託した。
7. 本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
8. 本報告書で使用した遺構、遺物写真は調査担当職員が撮影した。
9. 本報告書の執筆及び編集は、高橋が行った。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市文化振興課で保管している。

凡 例

1. 遺構の略称は「ISYG3」とした。
2. 本報告書における遺構名及び遺構番号は、調査地が近接する第1次、第2次調査との混同を防ぐため、ピット番号を除いて、第1次調査からの通し番号とした。
3. 本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。
土器、陶磁器：1/3 土錘：1/2 石製品：1/1、1/3 金属製品：1/2、1/1
瓦：1/4
4. 本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
6. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
7. ピット計測表において（ ）で表したものは残存部分での計測値である。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査体制	2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法	10
第2節 遺跡の立地と層序	
1. 遺跡の立地と現状	11
2. 遺跡の層序	11
第3節 検出した遺構と遺物	
1. I 期	13
2. II-1期	16
3. II-2期	16
4. II-3期	23
5. III 期	28
6. 遺構外出土遺物	31

第4章 総 括

第1節 出丸の構造と機能	
1. I 期	32
2. II-1期	33
3. II-2期	35
4. II-3期	36
第2節 出土遺物について	36

遺物観察表	40
-------	----

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	調査地位置図	3
第3図	周辺遺跡分布図	8
第4図	石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図	9
第5図	グリッド設定図	10
第6図	土層図	12
第7図	I期の遺構分布図	14
第8図	II-1期の遺構分布図	15
第9図	II-1期 腰郭9出土遺物図	16
第10図	II-2期の遺構分布図	17
第11図	II-2期出土遺物分布図	18
第12図	II-2期 腰郭9出土遺物図	19
第13図	掘立柱建物跡1遺構図及び出土遺物図	20
第14図	柵列3遺構図及び出土遺物図	21
第15図	土坑5遺構図及び出土遺物図	22
第16図	P28遺構図	23
第17図	P28出土遺物図	24
第18図	II-3期の遺構分布図	25
第19図	II-3期出土遺物分布図	26
第20図	II-3期 郭1出土遺物図	27
第21図	II-3期 腰郭9出土遺物図	27
第22図	段状遺構4遺構図	27
第23図	II-3期 切岸出土遺物図	28
第24図	III期の遺構分布図	29
第25図	III期出土遺物分布図	30
第26図	III期 遺構外出土遺物図	31
第27図	第2次・第3次調査 I期の遺構分布図	33
第28図	第2次・第3次調査 II-1期の遺構分布図	34
第29図	第2次・第3次調査 II-2期の遺構分布図	35
第30図	第2次・第3次調査 II-3期の遺構分布図	37
第31図	器種・産地別組成図	39
第32図	土器の器種別組成図	39
第33図	貿易陶磁の組成図	39

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	7
第2表	Ⅱ-2期 腰郭9ピット計測表	16
第3表	石井要害跡 第3次調査出土土器・陶磁器集計表	38
第4表	Ⅱ-1期 腰郭9出土遺物観察表	40
第5表	Ⅱ-2期 腰郭9出土陶磁器・土器観察表	40
第6表	Ⅱ-2期 腰郭9出土石製品観察表	41
第7表	掘立柱建物跡1出土遺物観察表	41
第8表	柵列3出土遺物観察表	41
第9表	土坑5出土遺物観察表	41
第10表	P28出土土器観察表	41
第11表	P28出土金属製品観察表	41
第12表	Ⅱ-3期 郭1出土遺物観察表	42
第13表	Ⅱ-3期 腰郭9出土遺物観察表	42
第14表	Ⅱ-3期 切岸出土陶磁器・土器観察表	42
第15表	Ⅱ-3期 切岸出土石製品観察表	42
第16表	Ⅲ期遺構外出土陶磁器・土器観察表	43
第17表	Ⅲ期遺構外出土金属製品観察表	43
第18表	Ⅲ期遺構外出土瓦観察表	43

写真図版目次

- 巻頭図版1 石井村田畑地続字限絵図・字要害
巻頭図版2 石井村・橋本村古城跡（『因伯古城跡図志』）
石井要害跡全景（西から）
- 図版1 調査地全体 調査前状況（南西から）
調査地全体 調査前状況（北西から）
- 図版2 頂部平坦面 調査前状況（北西から）
斜面中腹平坦地 調査前状況（北西から）
- 図版3 北東側斜面 調査前状況（北東から）
調査位置全景（上が北西）
- 図版4 調査地全景（上が南西）
調査地全景（北西から）
- 図版5 調査地全景（北東から）
調査地全景（南東から）
- 図版6 頂部平坦面土層
斜面部土層
- 図版7 斜面中腹平坦地土層
腰郭8（南東から）
- 図版8 II-1期の遺構全景（北西から）
II-1期の遺構全景（南東から）
- 図版9 II-1期 腰郭9（北西から）
II-1期 腰郭9（南東から）
- 図版10 II-2期の遺構面検出状況（北西から）
II-2期の遺構面検出状況（南東から）
- 図版11 II-2期 郭1（北西から）
II-2期 郭1（南東から）
- 図版12 II-2期 腰郭9平坦面検出状況（北西から）
II-2期 腰郭9平坦面検出状況（南東から）
- 図版13 II-2期 土坑5（北東から）
II-2期 掘立柱建物跡1（南西から）
- 図版14 II-2期 柵列3（北西から）
II-2期 柵列3（南西から）
- 図版15 II-2期 P28内遺物出土状況推移
- 図版16 II-3期の遺構全景（北西から）
II-3期の遺構全景（南東から）
- 図版17 II-3期 郭1（北西から）
II-3期 郭1（南東から）
- 図版18 II-3期 腰郭9（北西から）
II-3期 腰郭9（南東から）
- 図版19 II-3期 段状遺構4（北東から）
II-3期 段状遺構4（南東から）
- 図版20 III期の遺構全景（北西から）
III期の遺構全景（南東から）
- 図版21 III期 頂部平坦面（北西から）
III期 頂部平坦面（南東から）
- 図版22 III期 溝3（南東から）
調査風景
- 図版23 II-1期 腰郭9出土遺物
II-2期 腰郭9出土土器・土製品
II-3期 郭1出土遺物
II-2期 腰郭9出土石器
掘立柱建物跡1出土遺物
土坑5出土遺物
III期 遺構外出土金属製品
- 図版24 II-2期 腰郭9出土遺物（1）
- 図版25 II-2期 腰郭9出土遺物（2）
- 図版26 P28出土土器
P28出土金属製品
- 図版27 II-3期 腰郭9出土遺物
II-3期 切岸出土遺物（1）
- 図版28 II-3期 切岸出土遺物（2）
- 図版29 柵列3出土遺物
II-3期 切岸出土石製品
III期 遺構外出土瓦
- 図版30 III期 遺構外出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市石井地内において計画された石井地区急傾斜地（石井要害公園区域）崩壊防止工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

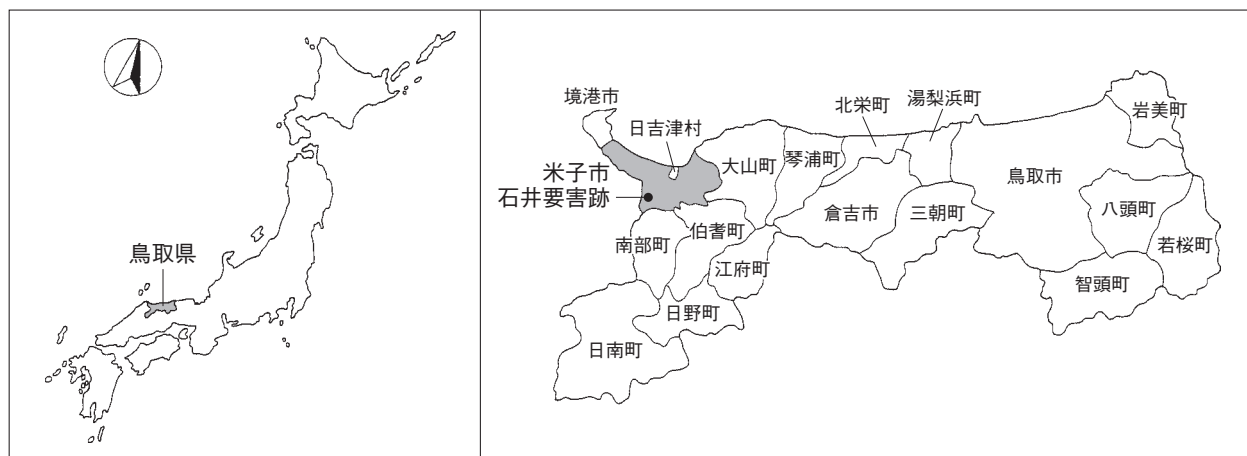
工事対象地は、周知の遺跡である石井要害跡の出丸として認識されており、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要があるが生じた。現地踏査では、丘陵の頂部は平坦地形となっていることから、郭の存在が窺え、また、米子市教育委員会（現米子市文化振興課）が平成28年度に実施した試掘調査では、丘陵の北東側斜面で腰郭が検出され、須恵器、陶磁器、瓦が出土した。

この結果を受け、米子市都市整備部道路整備課と米子市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、米子市は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、当財団は、平成31年2月26日付で文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を鳥取県知事に提出し、平成31年4月1日付で米子市と契約をした。それに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は、出丸の工事対象地の542.8㎡を対象とし、平成31年4月8日から令和元年6月5日までの期間で現地調査を行った。

調査対象地は、出丸の頂部平坦面の北東側とその北東側斜面であり、急斜面であるため、重機の搬入ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。調査の最終段階では、業者委託により調査後の空中写真撮影を実施した。



第1図 遺跡位置図

調査日誌抄

4月8日	発掘器材搬入
4月9日	発掘作業員稼働開始、調査区割のための杭打ち
4月9日～10日	調査地及び周辺の環境整備
4月10日～	発掘作業員稼働による表土・包含層の掘削及び遺構検出
4月17日	第1遺構面（Ⅲ期）調査終了
5月8日	段状遺構4完掘
5月10日	第2遺構面（Ⅱ-3期）調査終了
5月20日	第3遺構面（Ⅱ-2期）調査終了
5月30日	P28から銭貨出土
6月3日	第4遺構面（Ⅰ・Ⅱ-1期）調査終了
6月5日	業者委託による調査後空中写真撮影実施 発掘調査現場片付け、発掘器材撤収 調査終了

第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、令和元年度に実施した。出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第4節 調査体制

調査主体 一般財団法人 米子市文化財団

理事長 杉原弘一郎

常務理事 先灘達也（一般財団法人 米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員 小原貴樹

次長兼統括調査員 佐伯純也（令和元年7月31日まで）

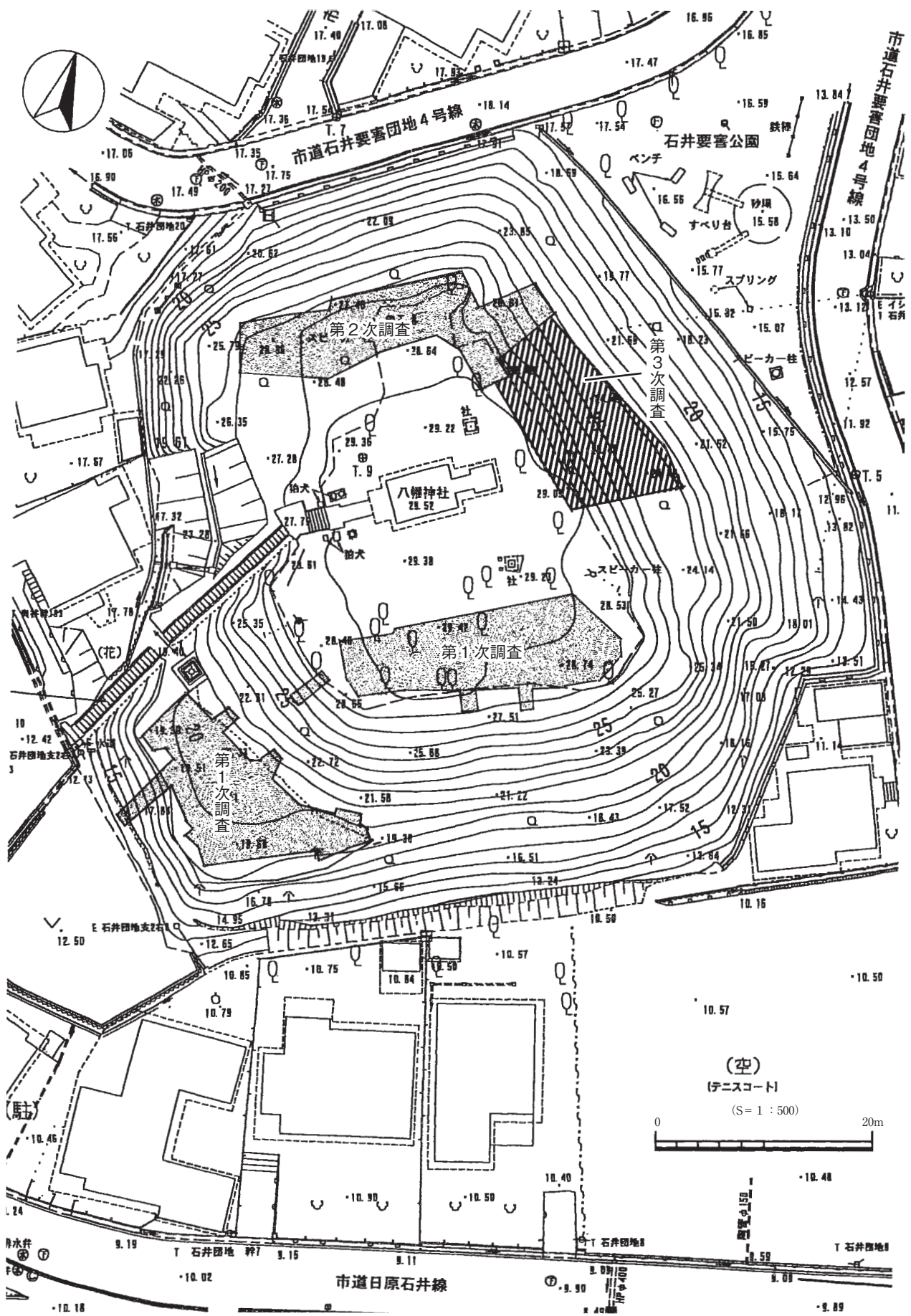
主 事 田中昌子

調査担当 室長兼調査員 小原貴樹

主任調査員 高橋浩樹

調査補助員 永登朋子

指導・助言 米子市文化振興課・鳥取県地域づくり推進部文化財局文化財課



第2図 調査地位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

米子市は、鳥取県の西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には、中国山地に源を発する日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山、中国山地から続くなだらかな山地や丘陵によって構成されている。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した2条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積世の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また、北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された砂州の弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は、弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山北西麓にかけて市域が広がり、北は境港市、東は大山町、南東は伯耆町、南は南部町、西は島根県安来市とそれぞれ接している。

石井要害跡は米子市西部の米子市石井に所在する。この地は米子市街地の南約3kmにある農村地帯で西へ約2km行けば島根県との県境となる。

調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡が立地する丘陵は、昭和44年に住宅団地造成工事のため大半が削平されているが、明治2年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』によると、楕円形の城郭として丘陵は3段に削られ、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。また、この辺りは出雲や備後に至る街道が通過し、橋本七尾城とともに西伯耆の防御拠点であった。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

周辺での人々の生活の痕跡は旧石器時代まで遡る。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡（21）では、大山テフラ層中から頁岩製のナイフ形石器が1点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が出土している。また、坂長村上遺跡（58）では大山テフラの漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代草創期には奈喜良遺跡（22）、陰田宮の谷遺跡（31）、吉谷亀尾ノ上遺跡（42）、福成石佛前遺跡（46）、境北井埜遺跡（44）、境矢石遺跡（45）、諸木遺跡（51）、坂長村上遺跡から尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では当該期の遺跡は少なく、清水谷

遺跡（48）で黄島式～高山寺式に比定される押型文土器、新山山田遺跡（38）で早期中葉の押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末から前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美遺跡（4）、陰田第1遺跡（30）、陰田第7遺跡（27）、陰田第9遺跡（29）がある。目久美遺跡では当該期には土器とともに多量の石錘と動植物遺体が出土している。また、陰田第9遺跡では、轟式の影響を受けた土器が出土している。

中期には現在のところあまり明確ではないが、遺跡の数が減少する傾向にある。目久美遺跡では、この時期のドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には、目久美遺跡、陰田第1遺跡、陰田第7遺跡、古市河原田遺跡（40）、青木遺跡（16）などがあり、青木遺跡では多数の陥穴が確認されている。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山下山遺跡（36）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には、目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落が形成され、長砂第1遺跡（6）でも前期後葉～中期初頭の水田跡が確認されている。また、前期末～中期前葉には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（53）天王原遺跡（56）で断面V字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。目久美遺跡、長砂第2遺跡（7）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の2面の水田跡が検出され、長砂第2遺跡でも前期末～中期前葉と中期後葉～後期の水田跡が確認されている。

後期には前期～中期の拠点的な集落は継続するものは少なく、中期後葉から後期にかけて青木遺跡、福市遺跡（15）、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群（61）のように新たに拠点的な集落が形成され、古墳時代へと継続する。また、中期後葉～後期には遺跡は低地から丘陵へ立地が移動する傾向にあり、このような遺跡には陰田第1遺跡、陰田第6遺跡（28）、吉谷銭神遺跡（41）などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

古墳時代

前期の古墳には日原6号墳（13）、普段寺1号墳・2号墳（54）などがある。日原6号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壙墓2基が検出されている。普段寺1号墳は全長23mの前方後方墳で、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。普段寺2号墳は直径22～23mの円墳と考えられ、三角縁四神四獣鏡が出土している。青木遺跡では小型の方墳10基と円墳7基からなる古墳群と、これらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では土壙墓群が検出されている。

前期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡などがあり、池ノ内遺跡（5）では水田跡が検出されている。

中期の古墳には陰田41号墳、水道山古墳（8）、新山山田古墳群（39）、三崎殿山古墳（52）、浅井11号墳、福成春日山古墳などがある。陰田41号墳は直径30mの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺を有する。新山山田古墳群は10基からなる古墳群で、7号墳からは珠文鏡が出土している。三崎殿山古墳は全長108mの前方後円墳で、西伯耆最大の規模を誇る。福成春日山古墳は全長30m級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。また、水道山古墳からは斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獸鏡が出土している。

中期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡（37）などがある。

後期には群集墳が造られるようになり、本遺跡の周辺には東宗像古墳群（11）、宗像古墳群（12）、新山山田古墳群などがある。また、西伯耆地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、6世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ陰田横穴墓群、大塔山横穴墓群（10）、マケン堀横穴墓群（50）などがあり、これらはいずれも後背墳丘を有するという特色をもつ。

この時期の集落には青木遺跡、福成早里遺跡（47）、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

この時期の遺跡は法勝寺川西岸と長者原台地に多く分布している。法勝寺川西岸では、陰田遺跡群（24～26、28、31～35）、新山遺跡群（36～38）などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鍛冶、製鉄関連の遺構、遺物が検出され、さらに、木簡や円面硯、墨書土器などが出土しており、7世紀後半以降、官衙的性格を有するようになる。また、陰田第6遺跡では石敷道路が確認されており、中海沿岸と内陸部を結ぶ道と考えられている。以上のことから伯耆、出雲国境近くに位置するこの地域は極めて重要な場所であったと考えられる。

一方、長者原台地では法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳期の大寺廃寺跡や平安時代の坂中廃寺跡があり、さらに、これらに近接する長者屋敷遺跡（57）、坂長下屋敷遺跡（59）、坂長第6遺跡（60）では官衙的配置をとる大型建物群が確認されており、長者原台地上に会見郡衙が存在していたことが明らかとなりつつある。

集落としては青木遺跡、樋ノ口第4遺跡（17）、諏訪西山ノ後遺跡などがあり、樋ノ口第4遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎3枚、刀子、鋤先、墨挺を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。

中世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市内には石井要害（14）、橋本七尾城（23）、新山要害（43）、戸上山城（9）、飯山城（2）、河岡城、尾高城などが築かれる。『伯耆志』によると、橋本七尾城は守護山名氏の重臣行松氏が在城し、石井要害は片山小四郎が在城し、出雲からの侵攻に備えたという。

古墓は長者原台地で多く確認されており別所長峰古墓（18）、諏訪1号墳（19）、青木遺跡、別所中原地下式横穴（20）がある。別所長峰古墓と諏訪1号墳は、方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝篋印塔あるいは五輪塔を建てていたと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓

が3基検出された。経塚は長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。錦町第1遺跡（3）では畠跡が検出されている。

近世・近代

近世の城下町の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲、西伯耆、隠岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長5年（1600）周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡6万石を領有し、米子城主となる。やがて元和3年（1617）池田光政が因伯2国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永9年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治2年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

米子市石井は近世には石井村と称した。法勝寺往来がほぼ南北に通じ、藩政期の拝領高は419石余、本免は四ツ五分で、全村が米子荒尾氏の給地であった。幕末の『六郡郷村生高竈付』では生高471石余、竈数66とあり、『伯耆志』では林46町2反余、家数66、人数300とある。また、明治12年の『共武政表』では家数66、男102、女121、牛27、馬1とある。石井村は明治22年（1889）には会見郡成実村大字石井となり、昭和29年（1954）には米子市石井となり、現在に至っている。

1 米子城跡	2 飯山城跡	3 錦町第1遺跡	4 目久美遺跡
5 池ノ内遺跡	6 長砂第1遺跡	7 長砂第2遺跡	8 水道山古墳
9 戸上山城跡	10 大塔山横穴墓群	11 東宗像古墳群	12 宗像古墳群
13 日原6号墳	14 石井要害跡	15 福市遺跡	16 青木遺跡
17 樋ノ口第4遺跡	18 別所長峰古墓	19 諏訪1号墳	20 別所中原地下式横穴
21 諏訪西山ノ後遺跡	22 奈喜良遺跡	23 橋本七尾城跡	24 陰田荒神谷遺跡
25 陰田小犬田遺跡	26 陰田ヒチリザコ遺跡	27 陰田第7遺跡	28 陰田第6遺跡
29 陰田第9遺跡	30 陰田第1遺跡	31 陰田宮の谷遺跡	32 陰田広畑遺跡
33 陰田隠れが谷遺跡	34 陰田ハタケ谷遺跡	35 陰田夜坂谷遺跡	36 新山下山遺跡
37 新山研石山遺跡	38 新山山田遺跡	39 新山山田古墳群	40 古市河原田遺跡
41 吉谷銭神遺跡	42 吉谷亀尾ノ上遺跡	43 新山要害跡(長台寺城跡)	44 境北井塔遺跡
45 境矢石遺跡	46 福成石佛前遺跡	47 福成早里遺跡	48 清水谷遺跡
49 丸山固屋跡(小鷹城跡)	50 マケン堀横穴墓群	51 諸木遺跡	52 三崎殿山古墳
53 宮尾遺跡	54 普段寺1・2号墳	55 手間要害跡	56 天王原遺跡
57 長者屋敷遺跡	58 坂長村上遺跡	59 坂長下屋敷遺跡	60 坂長第6遺跡
61 越敷山遺跡群			

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 周辺遺跡分布図



第4図 石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

石井地区急傾斜地（石井要害公園区域）崩壊防止工事は、石井要害跡の丘陵斜面が災害等により崩壊するのを防止する工事であり、本工事は、既に崩壊対策工事が行われている一部分を除いた、丘陵のほぼ全周が対象となっている。しかし、工区によって工事の事業主体が鳥取県・米子市と異なっているうえに、さらに鳥取県・米子市とも工区が各々2工区に分かれているために、全体として調査区を4つに分けて調査を実施することとなっている。本調査は、その第3次調査である。

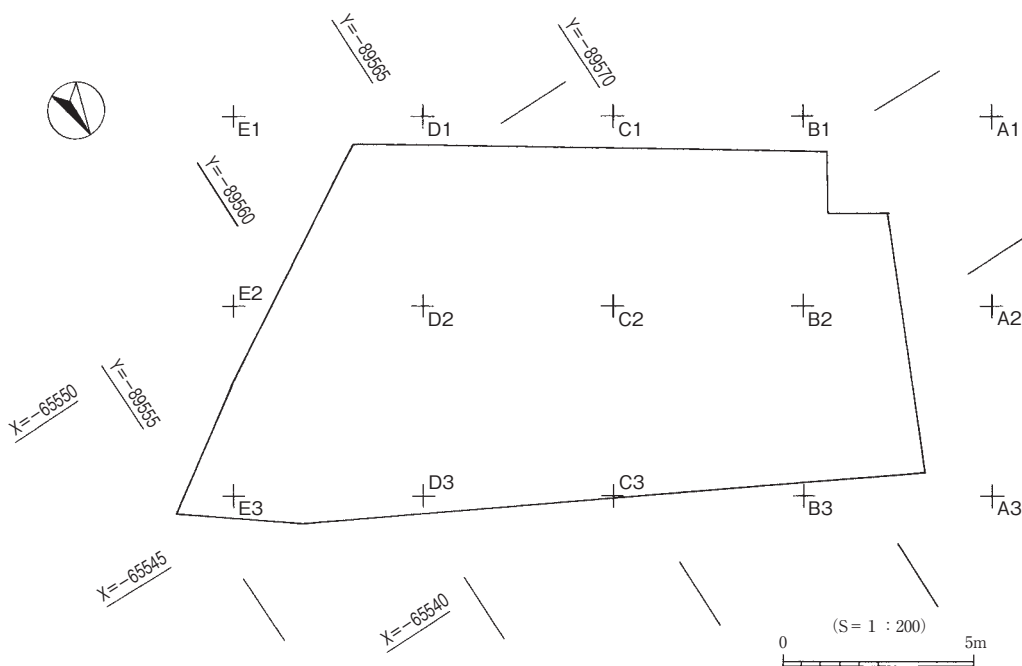
発掘調査は、出丸の丘陵頂部平坦面の北東側とその北東側斜面を対象として実施したが、北東側斜面の中腹以下は、昭和44年の住宅団地造成工事によって大きく削平されており、調査対象から除外した。

調査地は、急斜面であるために重機の使用ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。

調査にあたっては、調査区に沿うように任意で5m画のグリッドを設定し、グリッド単位で調査を行った。グリッドは北西から南東へ向かってA～Eとし、南西から北東へ向かって1～3とした。グリッド名は西側の杭の名称をとって呼称した（第5図）。

また、頂部平坦面と腰郭7の南西側は工事による法面よりも深く掘り込まれている部分があり、工事の関係上、工事による法面よりも深く遺構掘削ができないため、その部分については遺構を掘削することは避け、頂部平坦面については第3遺構面（Ⅱ-2期）までの調査に留め、調査の最終段階で、工事に支障のない北東側にトレンチを3ヶ所設定して下層の遺構、遺物を確認した。

なお、Ⅱ-2期の腰郭9は、地山の上に地山ブロック混じりの褐色土を10cm前後盛土して整地を行っているが、平坦面では遺構の検出が困難であったため、地山上面で検出した遺構のうち、埋土の



第5図 グリッド設定図

状況から帰属時期を判断した。

検出した遺構と遺物の記録には、遺跡調査システムを用いた。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。

第2節 遺跡の立地と層序

1. 遺跡の立地と現状

石井要害跡は、米子平野の西部に位置する。調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡は、明治2年作成の「石井村田畑地続字限絵図・字要害」によると楕円形の城郭として丘陵は三段に構築され、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。昭和44年に住宅団地造成工事のため大半が削平され、南側の八幡神社が鎮座している丘陵が残存しているのみである。この丘陵の頂部は平坦となっており、郭として機能したと考えられる。また、南西側及び南東側の切岸と南西側の腰郭は比較的良好に遺存しているが、北西側は住宅団地造成工事のため大きく削平され、北東側は斜面上部に切岸と腰郭が僅かに旧状を留めているのみである。

2. 遺跡の層序（第6図）

調査地の層序は、調査区の中央に設定したセクションベルトで観察した。

頂部平坦面では、現地表面から褐色土（現表土）、灰色土（2層）、淡褐色土（3層）、灰色ブロックが混じる淡褐色土（4層）、地山ブロックが混じる黄灰色土（5層）、赤褐色を呈する地山のバイラン土、地山となっている。

斜面部では、現表土が流出しており、現地表面から、灰色土（2層）、淡褐色土（3層）、黒灰色土（4層）、地山となっている。

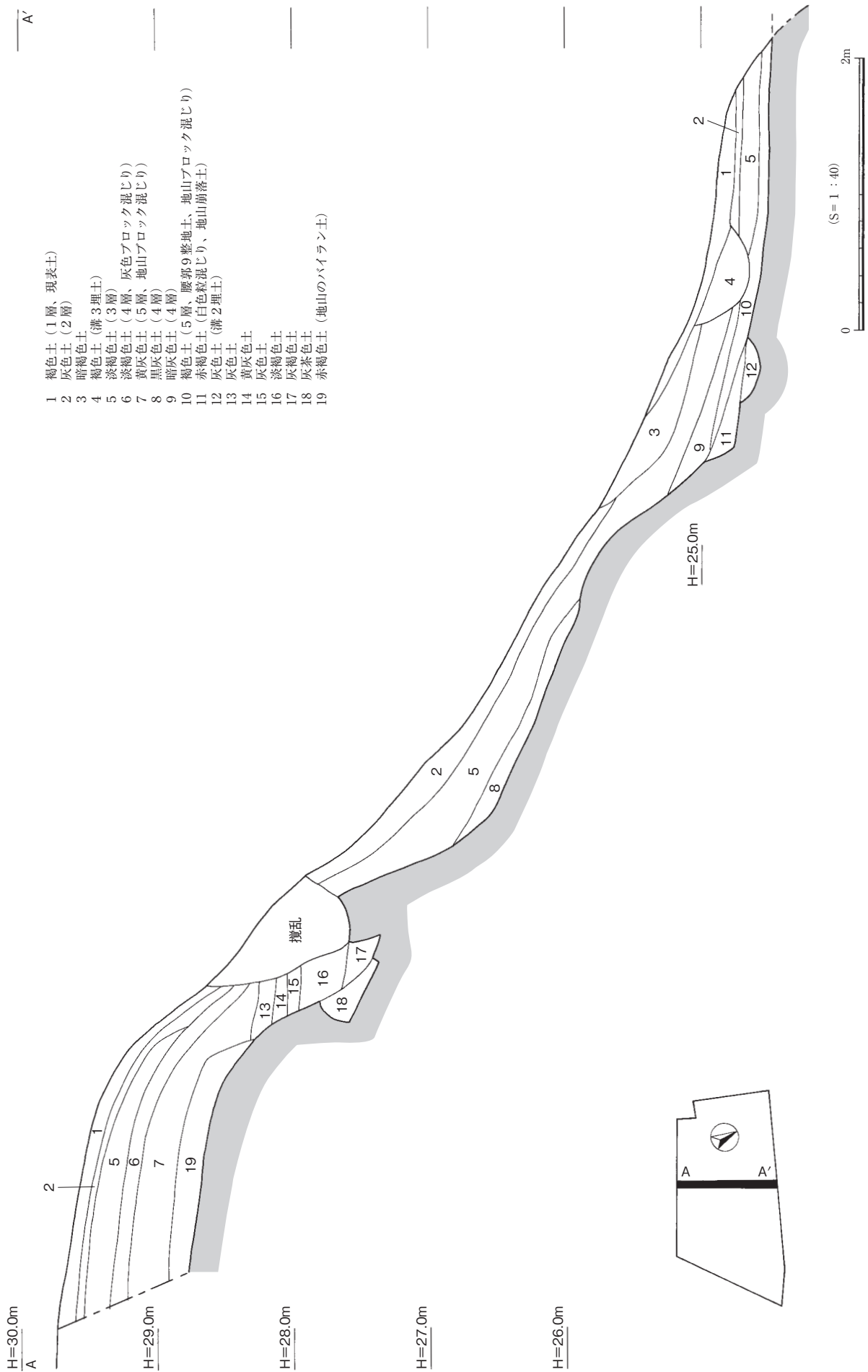
斜面中腹の平坦地では、現地表面から褐色土（現表土）、灰色土（2層）、淡褐色土（3層）、暗灰色土（4層）、地山ブロックが混じる褐色土（5層、腰郭9の整地土）、地山となっており、南西側の地山直上には赤褐色を呈する地山の崩落土が堆積している。

今回の調査では、3層上面を第1遺構面、4層上面を第2遺構面、5層上面を第3遺構面、地山上面を第4遺構面として遺構を検出したが、斜面中腹の平坦地では、地山上面で2時期の遺構を確認した。

第3節 検出した遺構と遺物

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の北東側とその北東側斜面を対象として調査を実施した。今回の調査では、現代の遺構も含めて5時期の遺構面が確認された。本稿では、石井要害跡に関わるものについては、第1次、第2次調査との整合性を持たせるために時期の古い順にⅠ～Ⅲ期として報告するが、今回の調査では、Ⅱ期には3面の遺構面が存在することから、さらにⅡ期をⅡ-1～Ⅱ-3期に細分して報告する。

各時期の帰属時期については、Ⅰ期は、出土遺物から15世紀後半に帰属すると考えられる。Ⅱ期



第6図 土層図

は、出土遺物やⅠ期の腰郭を埋め立てて第1次、第2次調査と同様に郭の拡張を行っていることから16世紀前半～中頃に帰属すると考えられる。Ⅲ期は、既往の調査では近世以降としているが、今回の調査では近世の遺構は認められず、現代の遺構を確認した。

1. Ⅰ 期

Ⅰ期の遺構は、地山上面（第4遺構面）で検出した。頂部平坦面ではトレンチ調査であるが郭1が検出され、北東側斜面の中腹では腰郭7、8、9の3郭が構築されている。

郭1（第7図）

郭1は、出丸の頂部平坦面の郭であるが、工事による法面保護のため、第3遺構面（Ⅱ-2期）までの調査に留め、当該期については、3ヶ所にトレンチを設定して平坦面及び平坦面での遺構の有無を確認した。平坦面の標高は、T2では28.7m、T3では28.9m、T4では28.5mを測り、遺構、遺物は検出されなかった。

腰郭7（第7図）

腰郭7は、北東側の斜面で検出した。南西側は工事の関係上調査ができなかったが、第2次調査でも検出しており、規模は、第2次調査で検出したものと合わせると、検出した範囲で長さ10.1m、幅1.0mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面の壁際には幅0.35～0.45m、深さ5～10cmを測る溝（溝1）があり、排水用の溝と考えられる。また、溝1は腰郭9の溝2に合流し、溝2よりも北東側にのびないことから、腰郭7は腰郭9よりも後に構築されたと考えられる。

本遺構からは、遺物は出土しなかった。

腰郭8（第7図）

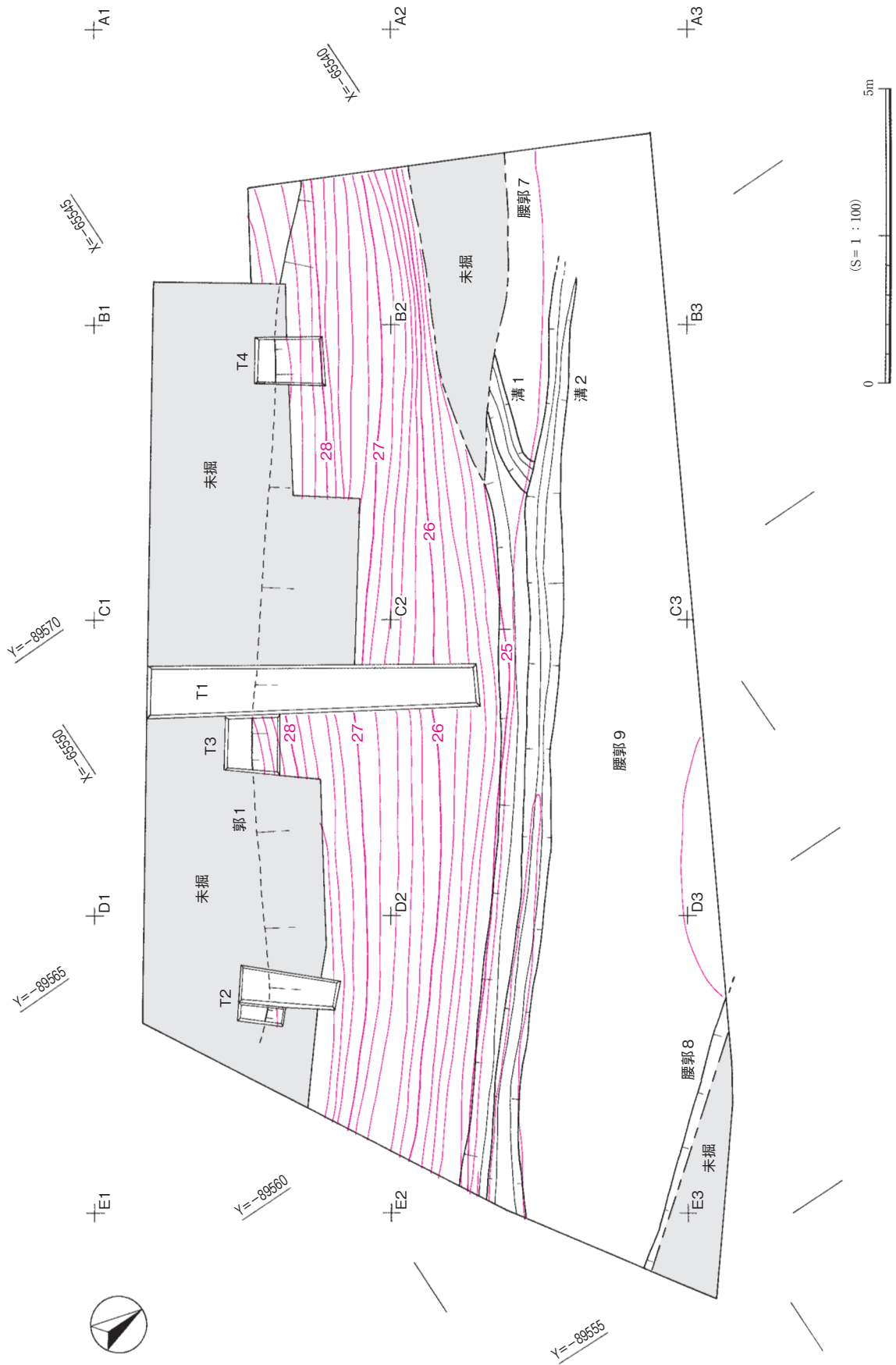
腰郭8は、北東側の斜面で検出した。腰郭9の北東側に位置し、北東側は住宅団地造成工事により削平されているが、規模は、検出した範囲で長さ4.8m、幅は最大で1.3mを測る。深さについては、調査区の北東側の斜面には大量の廃土があり、遺構を掘削するには廃土を除去しなければならなく、調査期間の関係もあり、約20cm掘り下げたに留めた。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

腰郭9（第7図）

腰郭9は、北東側の斜面で検出した。北西—南東方向にのび、北東側は腰郭8が掘り込まれている。規模は検出した範囲で長さ19.1m、幅1.3～3.3m、頂部平坦面との比高差4mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面では溝状遺構1条を検出した。溝2は幅0.3～0.6m、深さ5～20cmを測り、腰郭9の平坦面の壁際に位置することから、排水用の溝と考えられる。

本遺構からは、遺物は出土しなかった。

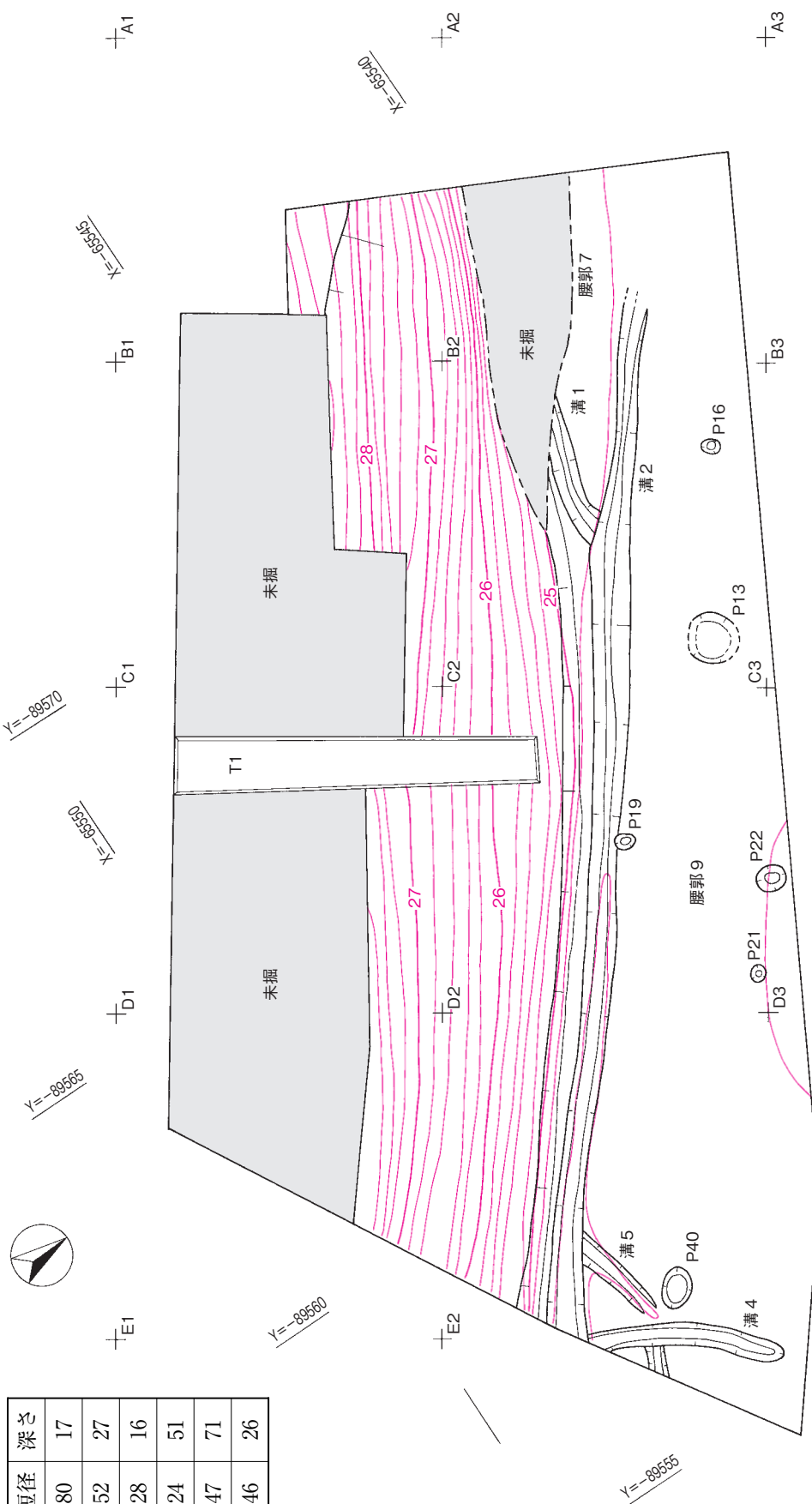


第7図 I期の遺構分布図

腰郭9ピット計測表

(単位：cm)

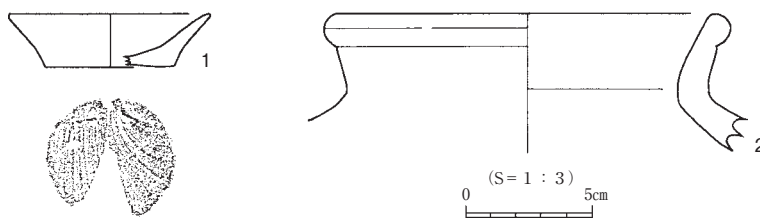
P	長径	短径	深さ
13	(73)	80	17
16	62	52	27
19	34	28	16
21	24	24	51
22	50	47	71
40	65	46	26



第8図 II-1期の遺構分布図

2. II-1期

II-1期の遺構は、地山上面（第4遺構面）で検出した。頂部平坦面は、工事の関係上、未調査であるが、郭1の存在が窺え、北東側斜面の中腹では、腰郭8を埋め立てて、



第9図 II-1期 腰郭9出土遺物図

腰郭9を北東側に拡張している。腰郭7もI期から引き続き当該期にも存在している

腰郭9（第8、9図）

当該期の腰郭9は、I期の腰郭8を埋め立てて、北東側に郭を拡張している。北東側は住宅団地造成工事により削平されているが、検出した範囲で長さ19.1m、幅1.3~3.5mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面ではピット6基と溝状遺構3条を検出した。溝4と溝5は、溝2から北東及び東へのびており、溝2の排水用の溝である可能性がある。なお、各ピットの規模は、第8図のピット計測表を参照されたい。

本遺構からは、土師質土器と陶器が出土した。

1はP16から出土した土師質土器の坏身で、口縁部は外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。2は溝4から出土した備前焼の壺で、口縁部は外傾し、口縁端部外面を肥厚させている。乗岡編年の中世5a期に比定される。

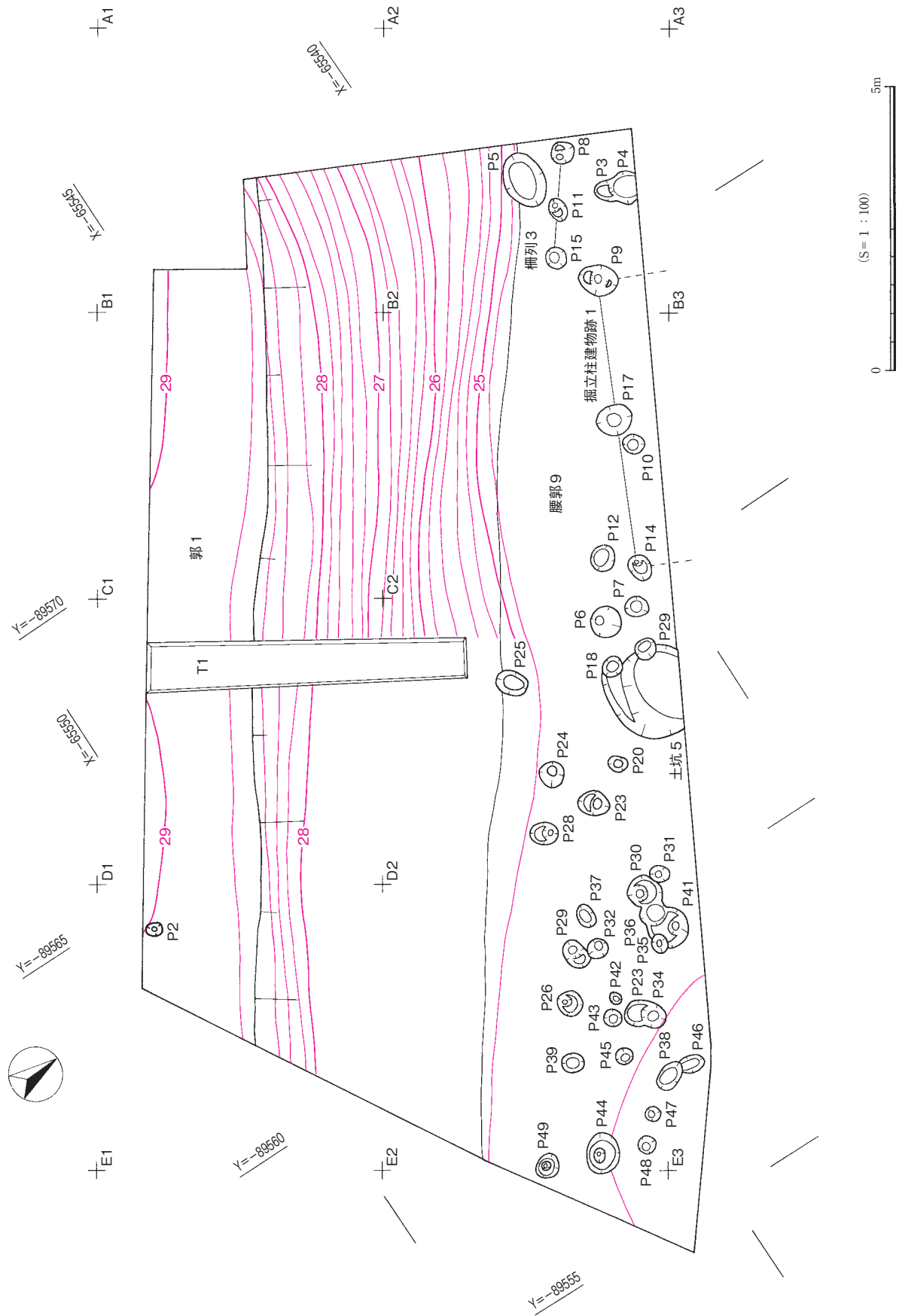
3. II-2期

II-2期の遺構は、5層上面（第3遺構面）で検出したが、T1よりも南東側は検出面の認識を見誤り、下層の地山上面まで掘り下げてしまった。頂部平坦面には郭1があり、北東側斜面では、I期からII-1期にかけて存在した腰郭7は埋め立てられ、腰郭9は整地が行われ、掘立柱建物跡1棟と柵列1条、土坑1基が検出された。また、腰郭9の平坦面で検出されたP28には土師質土器の坏身と銭貨26枚が埋納されており、地鎮的な性格が窺える。

第2表 II-2期 腰郭9ピット計測表

(単位：cm)

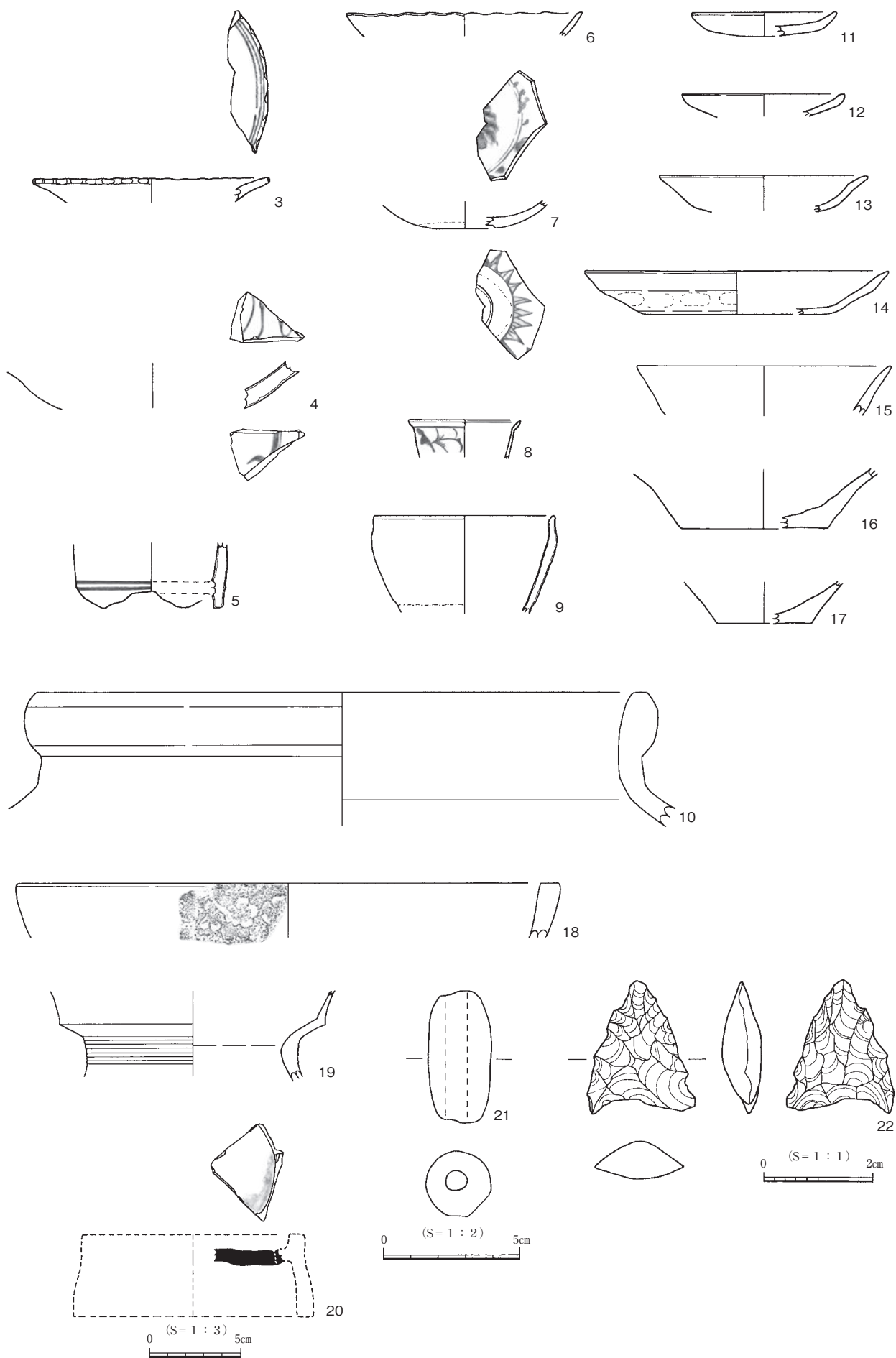
P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ
3	(48)	39	8	23	47	46	72	32	40	40	69	42	24	23	61
4	63	(48)	56	24	48	46	89	33	(55)	51	30	43	34	32	71
5	104	74	21	25	55	48	40	34	50	38	56	44	72	(61)	30
6	62	52	63	26	47	43	46	35	34	28	50	45	32	28	31
7	45	38	45	27	56	39	66	36	50	(42)	59	46	(47)	31	54
10	39	38	55	28	48	38	55	37	43	32	23	47	30	29	60
12	48	40	39	29	41	35	62	38	56	42	64	48	34	32	57
18	42	33	65	30	61	56	71	39	40	37	55	49	44	38	64
20	38	26	56	31	(38)	36	12	41	69	66	42				



第10図 II-2期の遺構分布図



第11图 II-2期出土遺物分布图



第12図 II-2期 腰郭9出土遺物図

郭1 (第10図)

当該期の郭1の平坦面の標高は28.4~29.0mを測り、規模は、検出した範囲で長さ15.2m、幅1.8~2.1mを測る。平坦面の南東側でピット1基(P2)を検出した。P2の規模は、長径24cm、短径22cm、深さ21cmを測る。

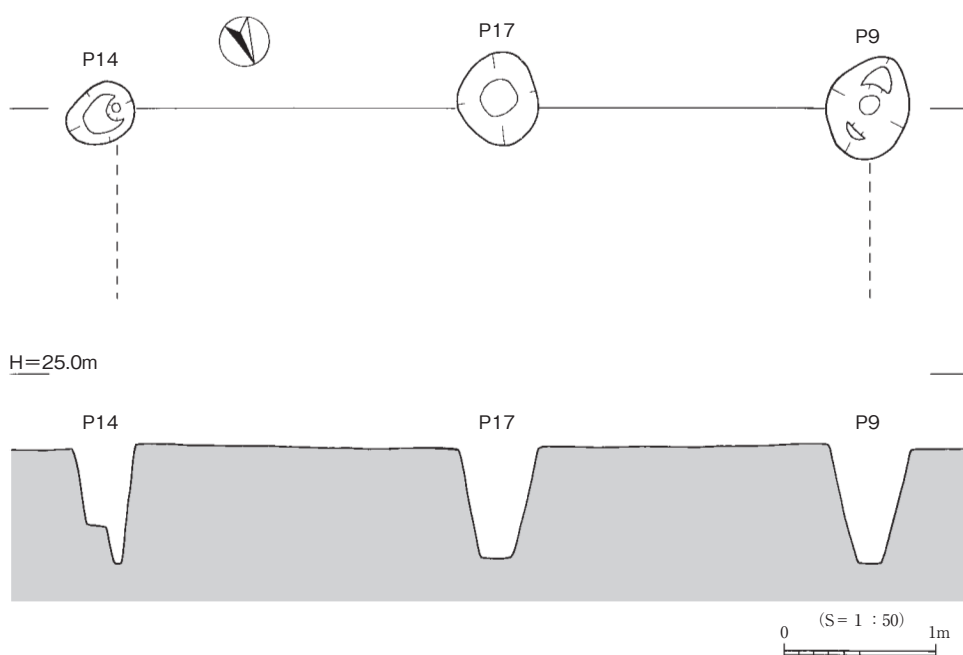
本遺構からは青磁、陶器、土師質土器が出土したが、いずれも細片であるため、図示できなかった。

腰郭9 (第10、12図)

当該期の腰郭9は地山の上に厚さ10cm前後の整地を行っている。平坦面では、遺構の検出が困難であったため、下層の地山上面で遺構を検出し、その埋土の状況から本遺構面から掘り込まれている遺構と判断した。平坦面では、35基のピットを検出し、北西側では掘立柱建物跡1棟と柵列1条、中央部では土坑1基を検出した。なお、各ピットの規模は、第2表のピット計測表を参照されたい。

本遺構からは、青磁、白磁、青花、陶器、土師質土器、弥生土器、須恵器、土製品、石器が出土した。

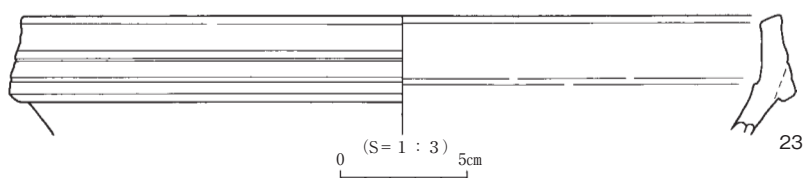
3~5は青磁である。3は稜花皿で、口縁端部に稜を持ち、内面には3条の圈線が施文されている。4は盤、5は香炉で、5の外面には2条の圈線が施文されている。6は白磁で、森田分類E群の皿である。7、8は青花である。7は小野分類C群の皿で、外面には芭蕉葉文、内面には唐草文、見込みには捻花文が施文されている。8は小坏で、外面には1重の圈線と唐草文、内面には1重の圈線が施文されている。9は中国産の天目茶碗である。10は備前焼の甕で、口縁部は直立し、口縁端部外



掘立柱建物跡1ピット計測表

(単位: cm)

P	長径	短径	深さ
14	48	40	85
17	64	44	75
9	72	55	80



第13図 掘立柱建物跡1遺構図及び出土遺物図

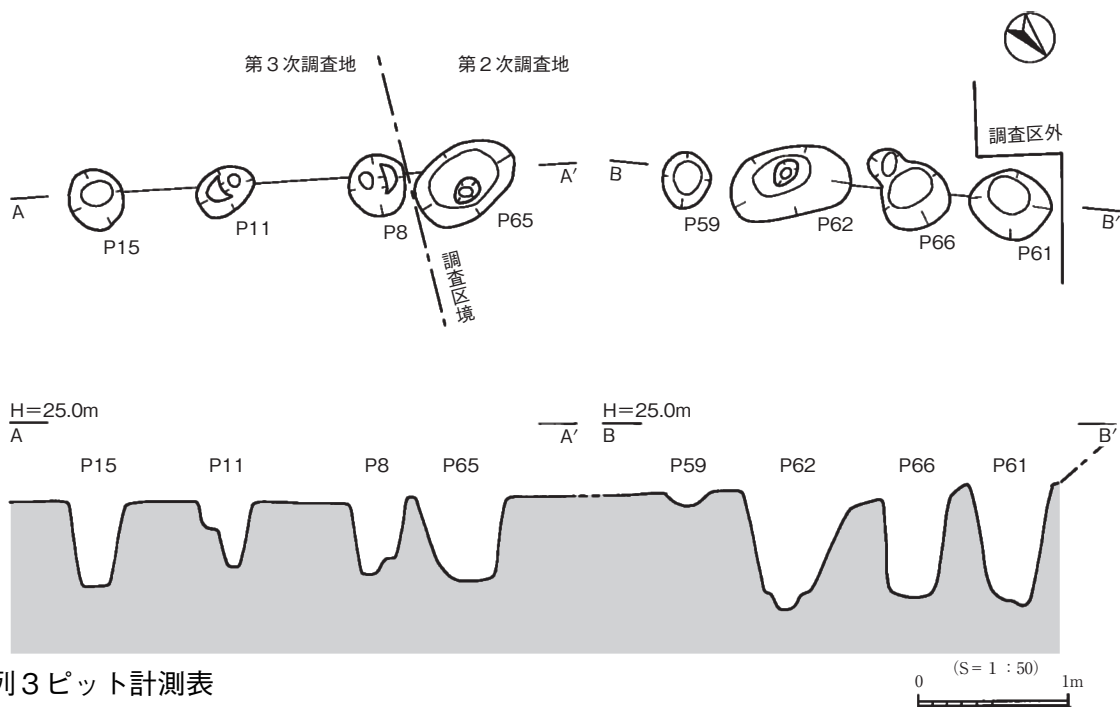
面を肥厚させて扁平な口縁帯を持つ、乗岡編年の中世5b期に比定される。11～14は京都系の土師質土器の皿で、12はP45、14はP34から出土した。11、12、14は口縁部が内湾するが、13は口縁部が僅かに外反する。15～17は土師質土器の坏身である。15はP25から出土した口縁部で、外傾して立ち上がる。16、17は底部で、いずれも底部外面には静止糸切りが施されている。16はP6、17はP23から出土した。18は火鉢で、外面には5弁の花文のスタンプ文が施されている。19はP44から出土した複合口縁を有する弥生土器の壺で、頸部外面には8条の平行沈線が巡る。20は須恵器の円面硯の陸部で、外面の縁辺部には墨痕が認められる。21は管状土錘、22は黒曜石製の石鏃である。

掘立柱建物跡 1 (第13図)

掘立柱建物跡 1 は、腰郭 9 の北西側で検出した。北東側は住宅団地造成工事によって削平されているが、桁行 2 間、梁行 1 間の南東—北西方向の建物と考えられる。柱穴間の距離は P14—P17 間、P17—P9 間とも 2.5m の等間である。なお、各ピットの規模は、第 13 図のピット計測表を参照されたい。

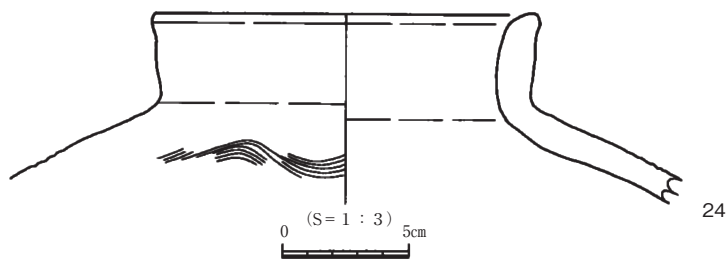
遺物は、P9 と P14 から土師質土器の細片、P17 から備前焼が出土した。

23 は P17 から出土した備前焼の播鉢で、口縁部は僅かに内傾し、口縁端部には外傾する面を有し、



柵列3ピット計測表
(単位：cm)

P	長径	短径	深さ
15	43	40	64
11	41	35	45
8	44	44	59
65	80	47	60
62	78	56	71
66	44	42	68
61	53	47	78



第14図 柵列3遺構図及び出土遺物図

さらに外角をつまみ出している。口縁帯下角には面取りが施されている。乗岡編年の中世5a～5b期に比定される。

柵列3 (第14図)

柵列3は、腰郭9の北西端で検出した。今回の調査ではP15、P11、P8の2間分を検出したが、北西側に隣接する第2次調査でも、柵列3の延長上にP65、P62、P66、P61が一直線上に並ぶ。柱穴間の距離は、P15—P11間は0.9m、P11—P8間は0.9m、P8—第2次調査のP65間が0.7m、P65—P62間は2.1m、P62—P66間は0.8m、P66—P61間は0.7mで、P65—P62間は広く、この部分に出入口が存在したと考えられる。なお、各ピットの規模は、第14図のピット計測表を参照されたい。

遺物は、P8から備前焼が出土した。

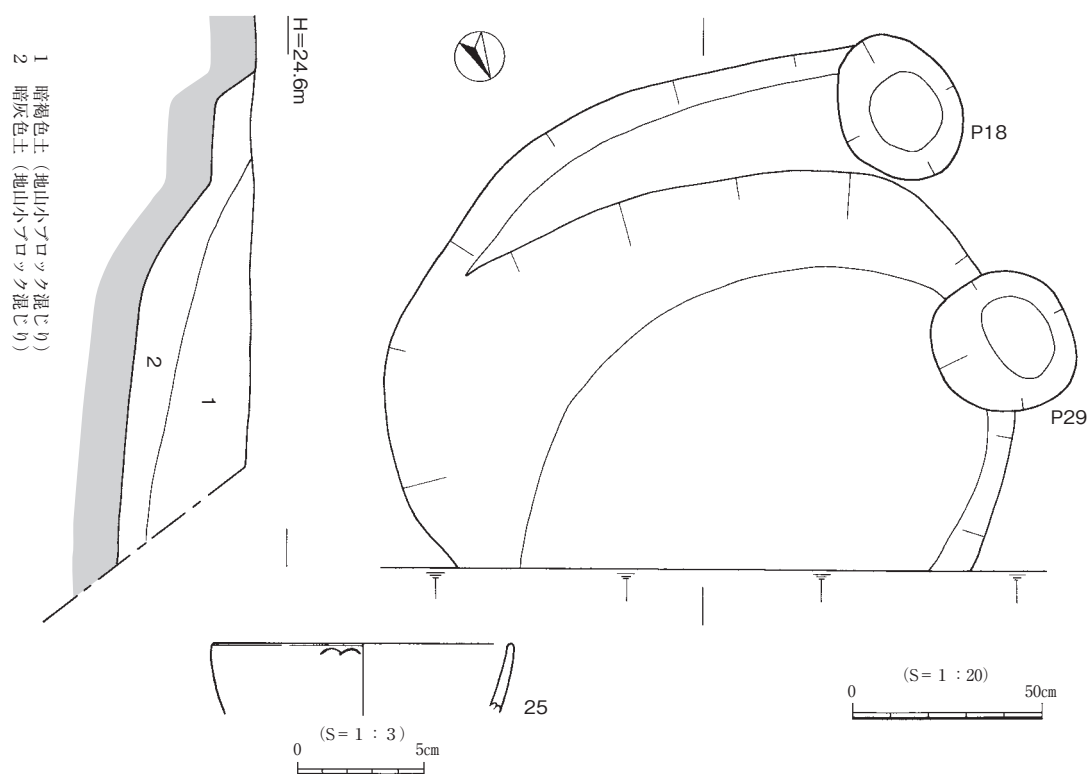
24は備前焼の壺で、口縁部は直立し、口縁端部は僅かに外反する。また、肩部外面には波状文が施されている。乗岡編年の中世5b期に比定される。

土坑5 (第15図)

土坑5は、腰郭9の中央で検出した。北東側は住宅団地造成工事によって削平され、南西側はP18に切られているが、平面形態は円形を呈すると考えられる。南西側は二段となっており、規模は、検出した範囲で長径1.65m、短径1.4m、深さ0.3～0.35mを測る。

本遺構からは、青磁、青花、陶器、土師質土器が出土した。

25は上田分類B5類の青磁碗で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。



第15図 土坑5遺構図及び出土遺物図

P28 (第16、17図)

P28は、腰郭9の平坦面の中央やや南寄りで検出した。規模は長径48cm、短径38cm、深さ55cmを測る。柱痕跡の中心から土師質土器の坏身と銭貨26枚が出土した。出土状況は、土師質土器の坏身は横転した状態で、内面を南東側に向け、銭貨は土師質土器の坏身の北西側から出土した。銭貨は数枚が固着した状態のものがあることから数珠状に束ねられていたと考えられる。

26は土師質土器の坏身で、口縁部は僅かに外反しながら立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。27～37は銭貨である。27は咸平通寶（北宋 初鑄998年）である。28は2枚が固着したもので、上面は景德通寶（北宋 初鑄1004年）であるが、下面の銭文は不明である。29は7枚が固着したもので、上面は祥符通寶（北宋 初鑄1008年）であるが、他の6枚の銭文は不明である。30は2枚が固着したもので、上面は元祐通寶（北宋 初鑄1086年）、下面は天聖通寶（北宋 初鑄1023年）で、書体は篆書である。31は3枚が固着したもので、上面は永樂通寶（明 初鑄1408年）、下面は皇宋通寶（北宋 初鑄1038年）であるが、真ん中の銭文は不明である。32は元豊通寶（北宋 初鑄1078年）である。33は2枚が固着したもので、上面は永樂通寶、下面は元豊通寶で、書体は篆書である。34は紹聖通寶（北宋 初鑄1094年）である。35は3枚が固着したもので、上面は聖宋通寶（北宋 初鑄1101年）で、書体は篆書である。真ん中の銭文は不明で、下面は永樂通寶か。36は永樂通寶である。37は2枚が固着したもので、裏面同士がくっついているため、銭文は不明である。この他に破損して微細片となっているため、図化、採拓はできなかったが、元豊通寶が1枚ある。

本遺構の性格は、地鎮に関わるものと考えられる。

4. II-3期

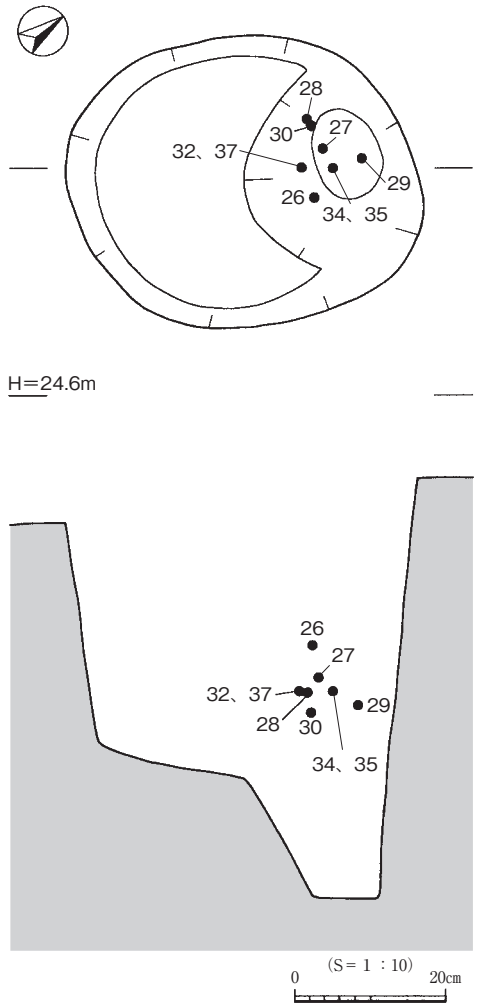
II-3期の遺構は、4層上面（第2遺構面）で検出した。頂部平坦面には郭1があり、北東側斜面では、上部に段状遺構4があるが、中腹の腰郭9の平坦面では遺構は検出されなかった。

郭1 (第18、20図)

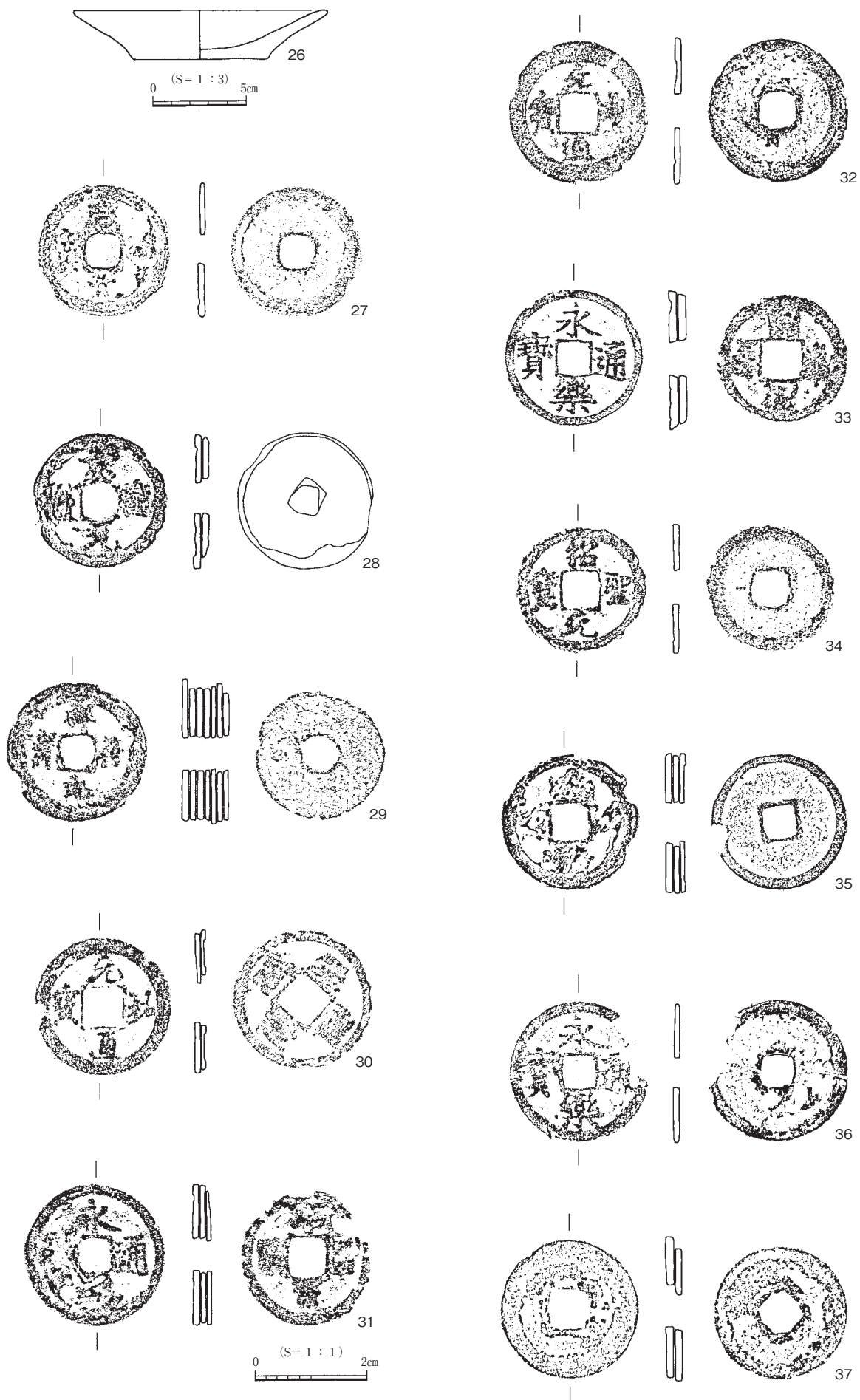
当該期の郭1の平坦面の標高は28.7～29.1mを測り、平坦面の中央やや南東寄りでピット1基（P1）を検出した。P1の規模は、長径32cm、短径28cm、深さ60cmを測る。

本遺構からは、青磁、白磁、青花、陶器、土師質土器が出土した。

38は朝鮮半島産の粉青沙器の皿で、見込みと高台には砂目がある。39は備前焼の播鉢で、内面には10条1単位の揃り目がある。乗岡編年の中世5a期に比定される。



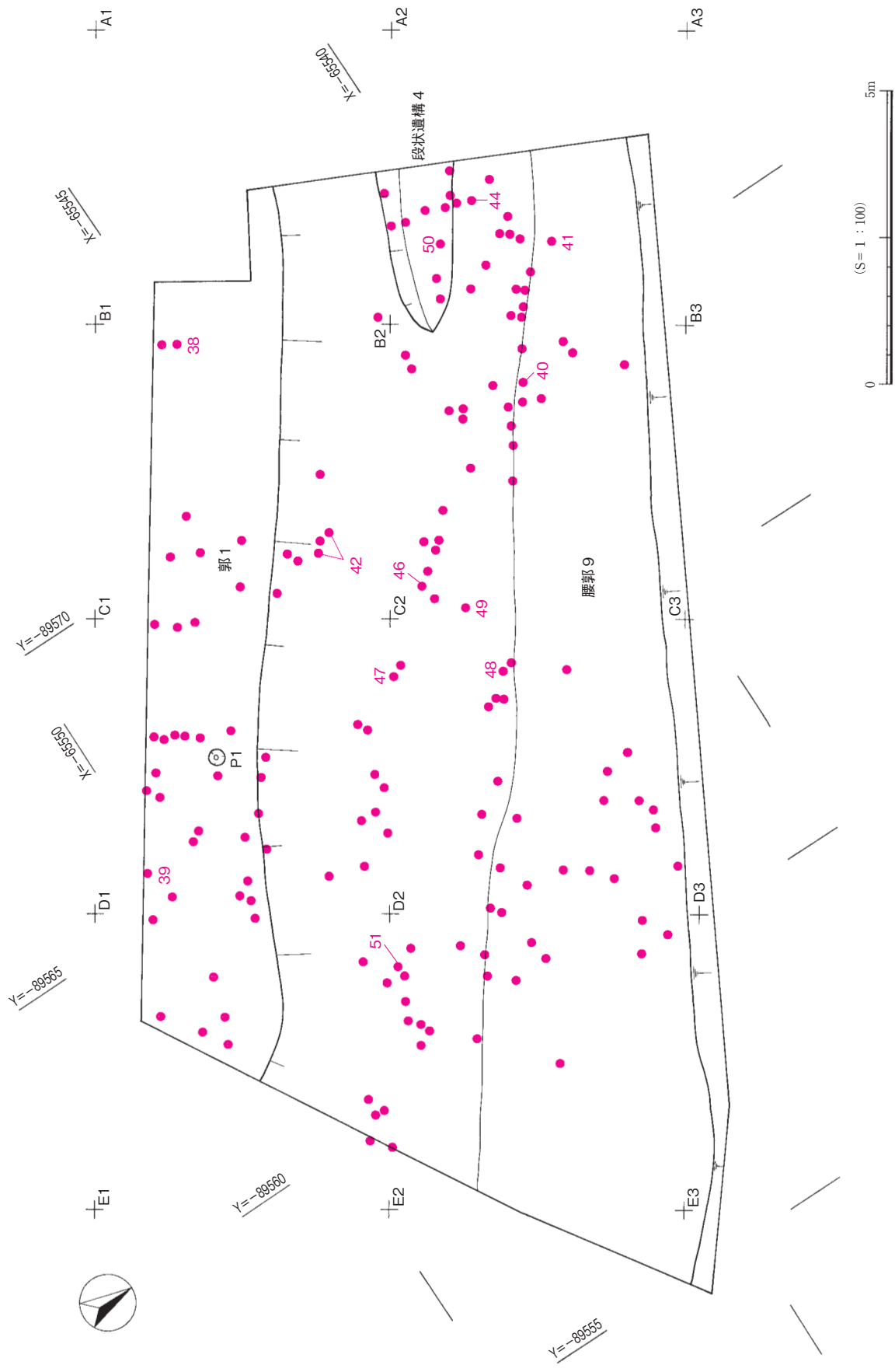
第16図 P28遺構図



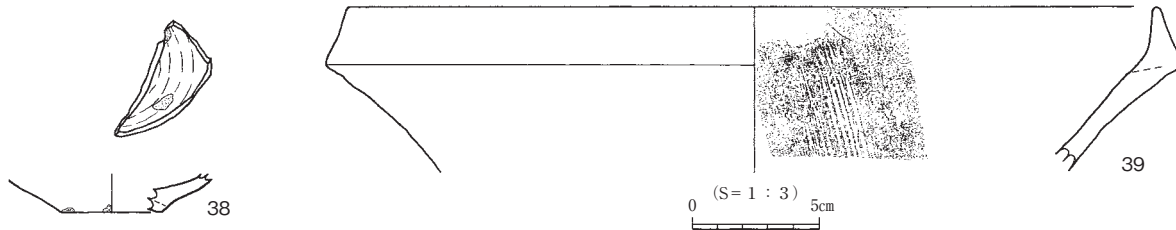
第17図 P28出土遺物図



第18図 II-3期の遺構分布図



第19図 II-3期出土遺物分布図



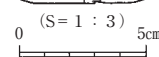
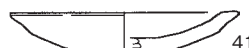
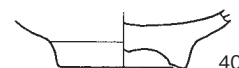
第20図 II-3期 郭1出土遺物図

腰郭9 (第18、21図)

当該期の腰郭9は、4層上面(第2遺構面)を平坦面とするが、平坦面では遺構は検出されなかった。

本遺構からは青磁、白磁、青花、陶器、土師質土器が出土した。

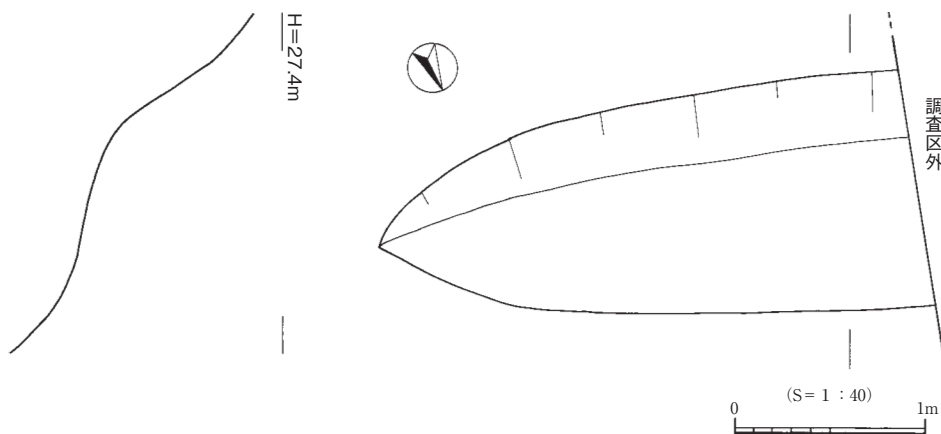
40は朝鮮半島産の白磁の皿の底部、41は京都系の土師質土器の皿である。



第21図 II-3期 腰郭9 出土遺物図

段状遺構4 (第22図)

段状遺構4は、北東側斜面の標高26.0~27.2mで検出した。北西側は第2次調査地にかかるが、第2次調査では遺構面としての認識を行っていなかったため、検出できなかった。平面形態は弧形を



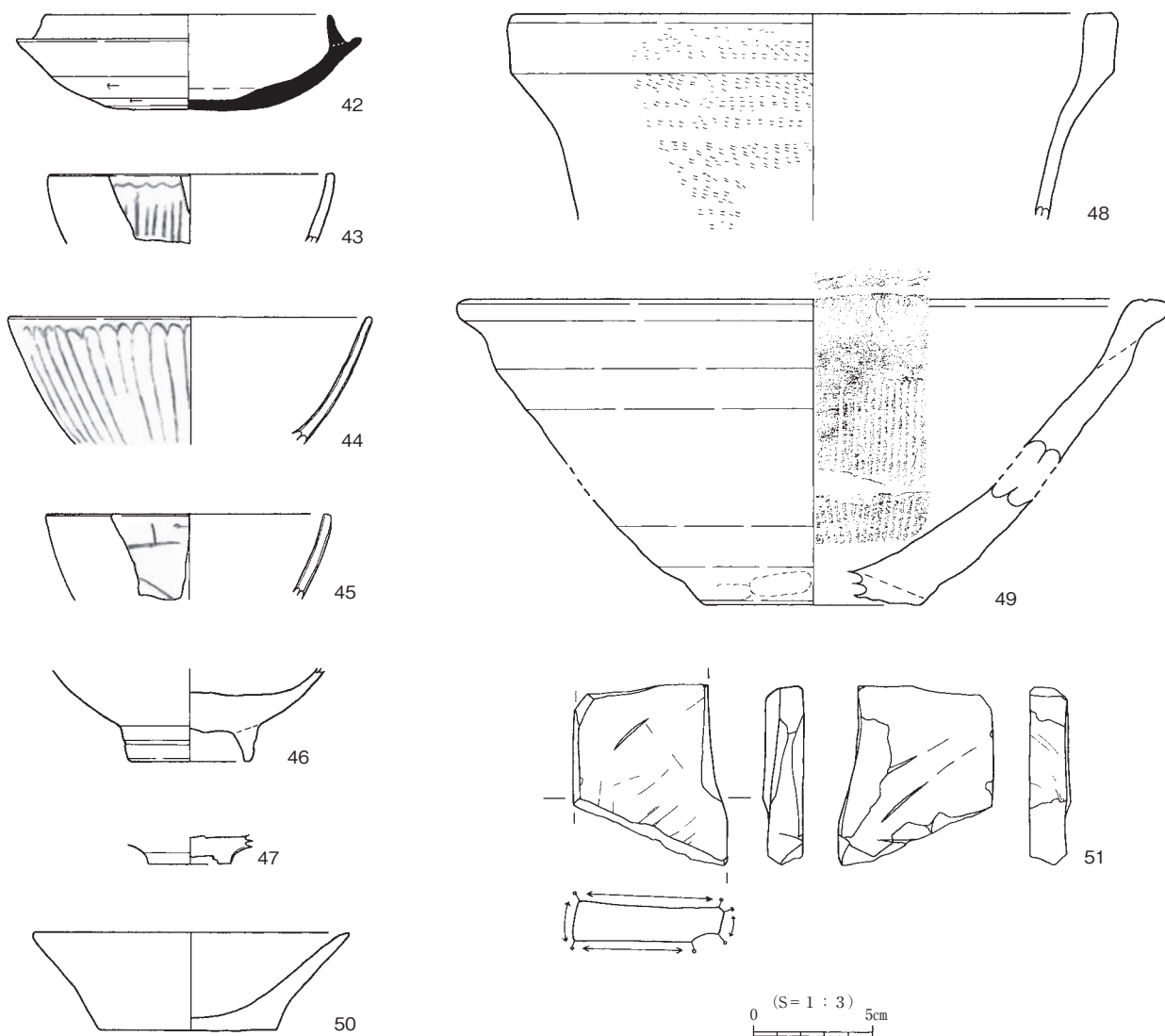
第22図 段状遺構4遺構図

呈すると考えられ、規模は、検出した範囲で長さ2.85m、幅1.25m、深さ0.6mを測る。

本遺構からは備前焼と土師質土器が出土したが、いずれも細片であるため、図示することができなかった。

切岸出土遺物 (第23図)

42~51は、当該期の切岸から出土したものである。42は須恵器の坏身で、口縁端部は丸くおさまり、受け部は外上方にのびている。43~47は青磁である。43、44は上田分類B5類の碗で外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。45は上田分類C2類の碗で、外面には雷文帯が施文されている。46は上田分類D類の碗の底部で、高台内部は露胎となっている。47は香炉の底部である。48は陶器で、器種は壺と想定される。口縁部は外反した後、直立し、口縁端部には水平な面を有する。外面には多くの刺突文が施され、外面には煤が付着している。49は越前焼の播鉢で、口縁部は外反し、口縁端部上面には1条の沈線が施されている。内面には12条1単位の播り目がある。50は土師質土器の坏身で、口縁部は外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。51は細粒花崗岩製の仕上砥の砥石で、長方形に加工した素材の表裏面及び左右両側面の4面を使用している。



第23図 II-3期 切岸出土遺物図

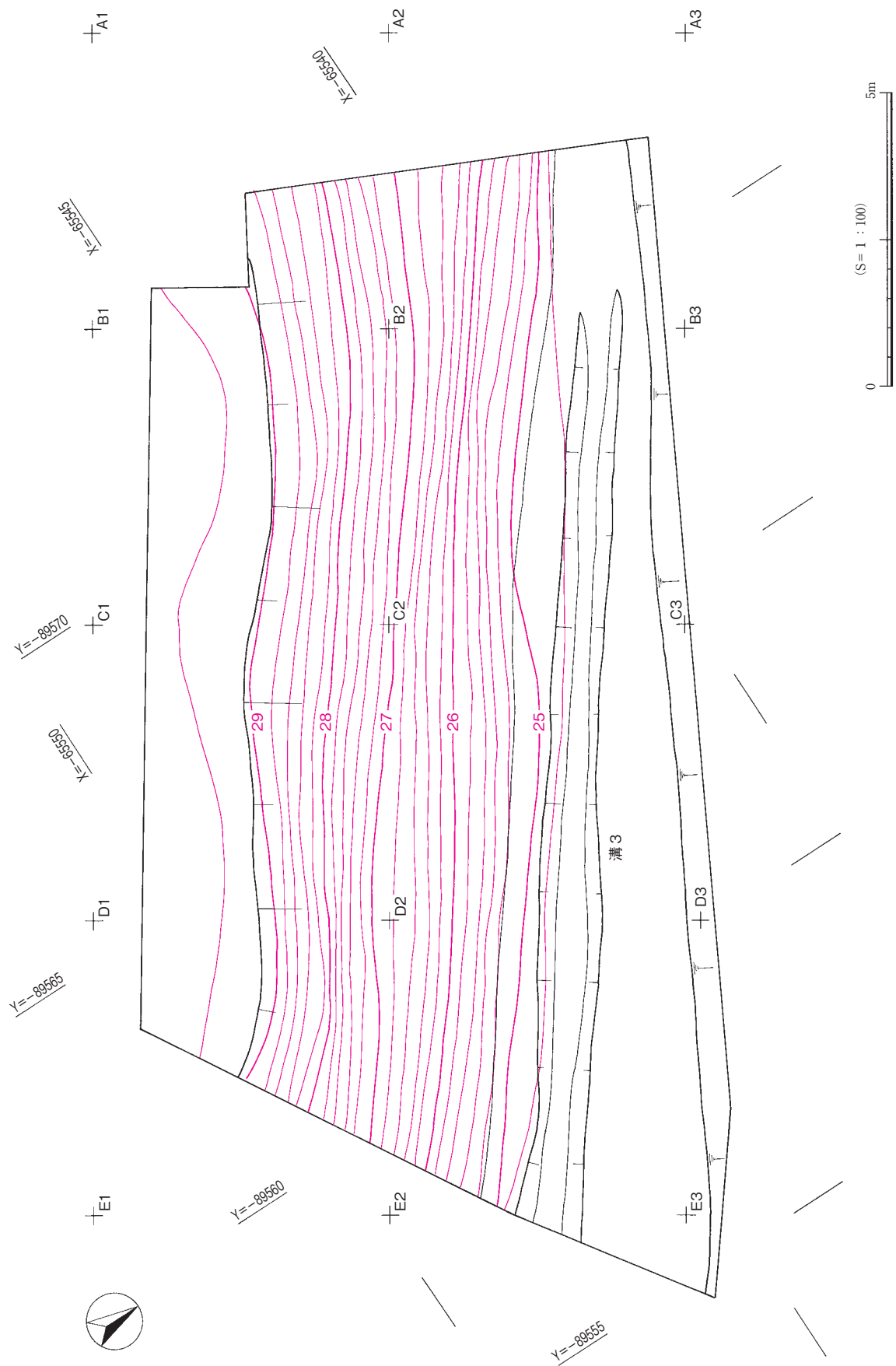
5. III 期

III期の遺構は、3層上面（第1遺構面）で検出した。北東側斜面中腹の平坦地で溝状遺構を1条検出した。

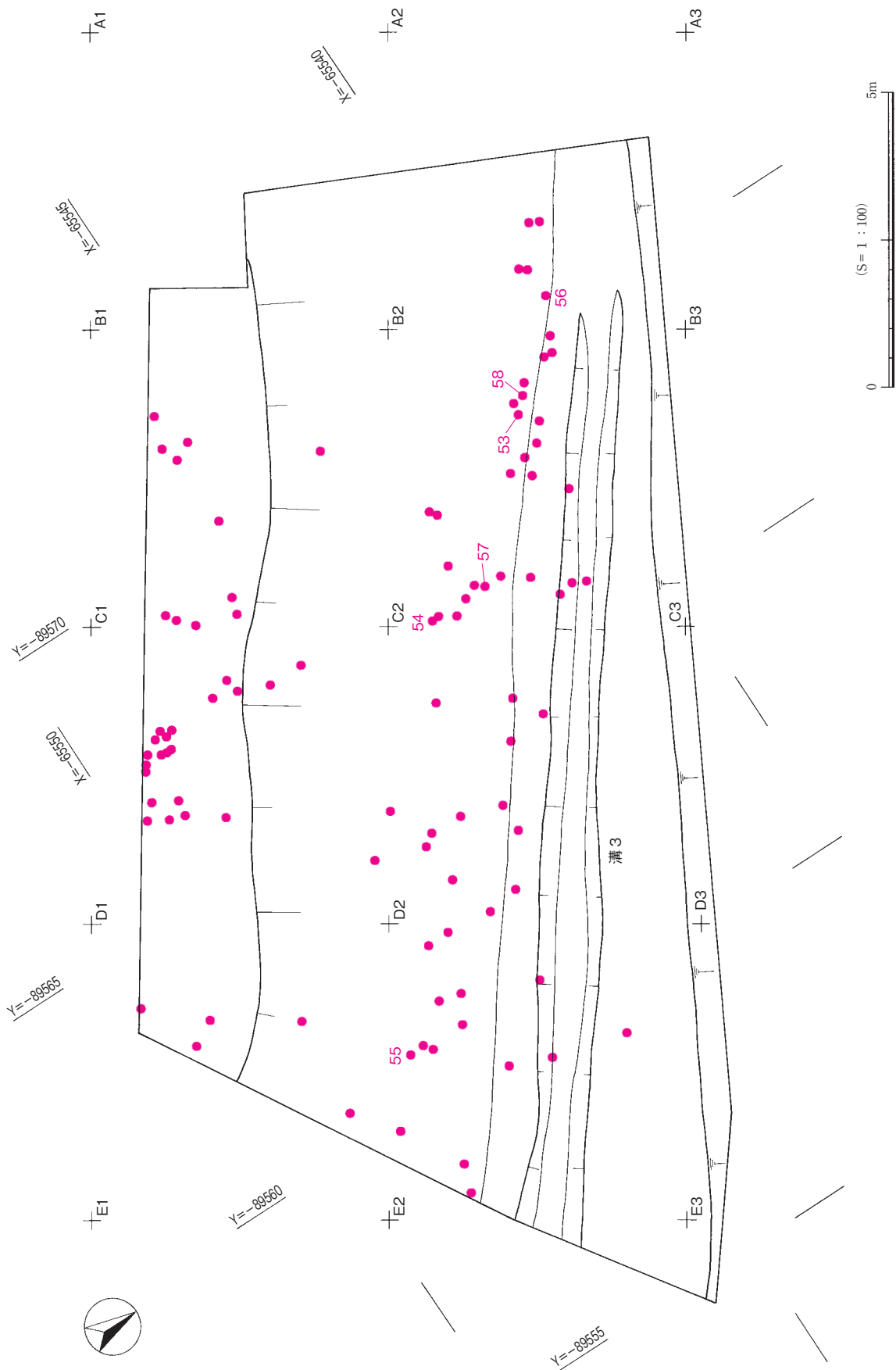
溝3（第24図）

溝3は、北東側斜面中腹の平坦地で検出した。南東—北西方向にのび、規模は長さ16.1m、幅0.75～1.1m、深さ10～25cmを測る。埋土は、草根が多く入り込んだ黒色土の単層である。遺物は出土しなかったが、埋土の状況と、直上層に現代のゴミ類が混じっていることから、本遺構の帰属時期は、現代と考えられる。

この平坦地は『石井村田畑地続字限図・字要害』（明治2年）の中段の平坦地に該当すると考えられ、地目は畑地となっており、本遺構は、畑の排水用の溝と考えられる。



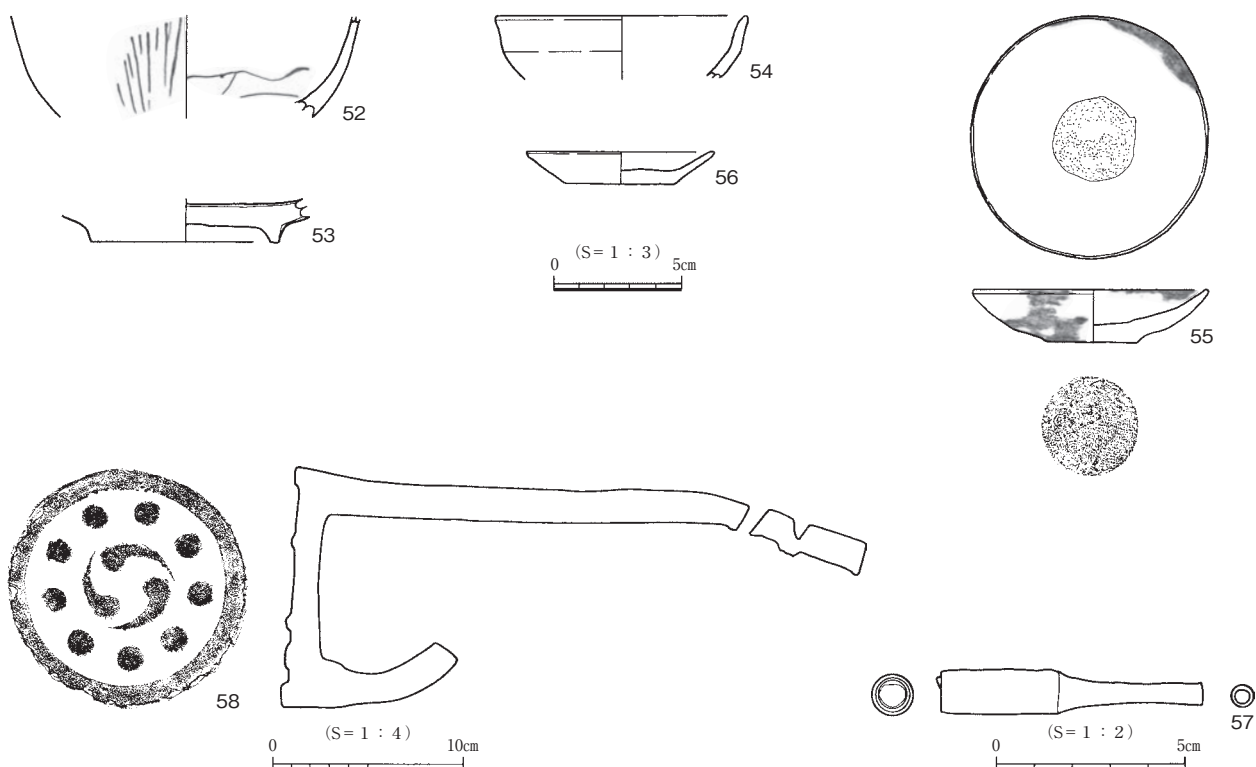
第24図 III期の遺構分布図



第25図 III期出土遺物分布図

6. 遺構外出土遺物 (第26図)

52~58は2層から出土したものである。52は上田分類B5類の青磁碗で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。53は青磁の盤の底部、54は中国産の天目茶碗である。55は陶器の灯明皿で、底部外面には回転糸切りが施されている。内面の見込みには円形の砂目があり、外面には煤が付着している。56は土師質土器の皿で、口縁部は外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。内外面に煤が付着していることから灯明皿として用いられたと考えられる。57は煙管の吸い口である。58は中付巴瓦で、外面と瓦当部には黒色の釉薬が施されている。瓦当文様は、内区は右三ツ巴文、外区は9つの珠文で構成されている。



第26図 Ⅲ期 遺構外出土遺物図

第4章 総括

第1節 出丸の構造と機能

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の北東側とその北東側斜面を対象として実施した。本稿では、本調査で確認された遺構や遺物と、本調査地の北西から西側にかけて隣接する第2次調査の成果とを合わせて出丸の構造や機能等について検討を行ってみたい。

第1次調査と第2次調査では、Ⅰ～Ⅲ期の3時期の遺構を確認しているが、今回の調査では、5面の遺構面を確認し、従来のⅡ期がⅡ-1期～Ⅱ-3期の3時期に細分され、全体的には5時期に区分されるものと考えられる。各時期の帰属時期は、Ⅰ期が15世紀後半、Ⅱ期が16世紀前半～中頃であるが、Ⅱ-1期～Ⅱ-3期は16世紀前半～中頃の範疇で、各々どれくらいの時期幅を持つのかは現状では明らかにすることができなかった。Ⅲ期は現代までも含む、近世以降である。

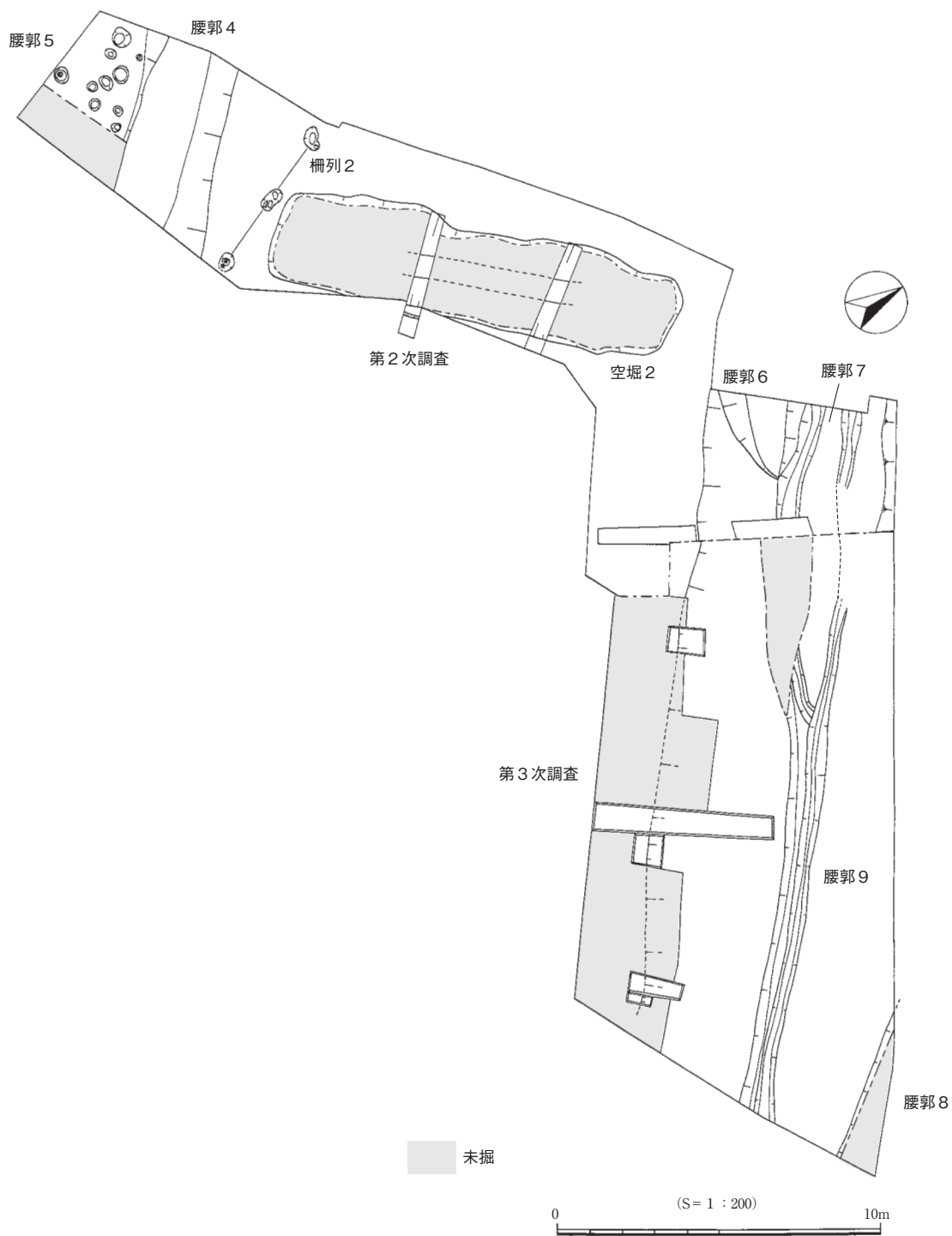
本稿では、この時期区分に準拠して、時期毎に出丸の構造について検討を行ってみたいが、Ⅲ期については、廃城後の時期であり、第2次調査では近世を主体とする遺構を検出したが、第3次調査では近世の遺構は確認されず、現代に帰属すると考えられる遺構を検出したのみであることから、Ⅲ期については除外して検討を行いたい。

1. Ⅰ期

Ⅰ期には、頂部平坦面の南西側には腰郭4と腰郭5の2段の腰郭を構築し、北東側には北東—南西方向にのびる長さ12.7m、上部幅2.5～3.2m、底面幅0.7m、深さ1.7mの空堀2を配している。空堀2の下層には地山に由来する層が北西から南東へ傾斜堆積していることから、空堀2の北西側に空堀2と平行する土塁の存在が想定される。空堀2の南西側には柵列2があり、北東側は切岸となっていることから、土塁は空堀2の北西側のみに存在したと想定される。土塁の北西側は、住宅団地の造成工事によって大きく削平されているため、その様相は窺い知れないが、明治2年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』では、本丸と出丸との間が切通し状となっていることから堀切が存在した可能性がある。

一方、北東側斜面では、傾斜度60°の切岸があり、頂部平坦面から3.5～4m下がった位置に腰郭6、7、9の3基の腰郭を構築し、さらに腰郭9の北東側にも腰郭8を構築している。(第2次調査では、腰郭6の北東側の腰郭を一括して腰郭7としていたが、第3次調査の結果、溝1と溝2の間が腰郭7、溝2よりも北東側が腰郭9となることが明らかとなった。)。腰郭8は、住宅団地造成工事により削平されているが、本来は北東側に広がり、さらに北西側にのびていたと考えられる。腰郭8の平坦面の高さについては、調査区の北東側に多量の廃土があるため、完掘することができず、明らかにすることはできなかった。

調査区の北西側では、腰郭6、7、9の3基の腰郭が南西—北東方向に連続して構築されている。この部分は本丸と出丸とを隔てる堀切に隣接する部分で、『旧成実村史』によると、本丸の上段の南東側を「マス形」、中段の東側を「昇りの段」と呼んでいたようであり、本丸の南東側に本丸への登城路が存在したと推察される。また、想像の域は出ないが、出丸の北隅にも出丸への登城路の存在が



第27図 第2次・第3次調査 I期の遺構分布図

想定され、おそらく、本丸と出丸において防御上、最も弱点である登城路の防御を強化するために、この位置に3基の腰郭を連続させて構築し、出丸の登城路を昇りきった頂部平坦面には空堀2と土塁を配したものと考えられる。

このようにみても、I期にはかなりの防御機能を有していることから、第1次調査、第2次調査と同様、軍事的性格が強いと考えられる。

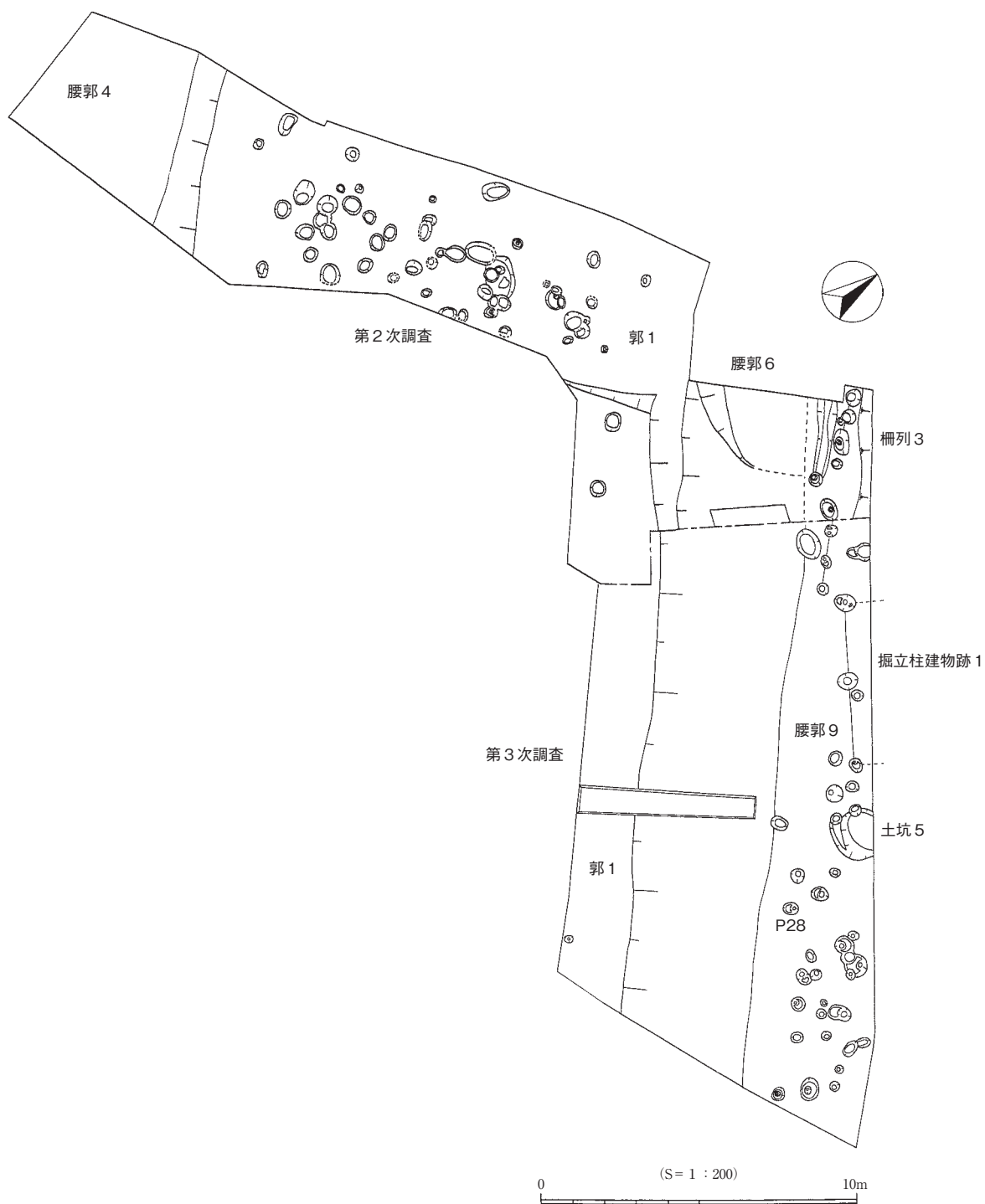
2. II-1期

II-1期には、頂部平坦面の北西側（第2次調査地）では、I期の土塁を削平して、空堀2を人為



第28図 第2次・第3次調査 II-1期の遺構分布図

的に埋め立てて頂部平坦面の郭1を拡張するとともに南西側の腰郭4も腰郭5を埋め立てて拡張を行っている。拡張された郭1では、54基のピットを検出した。建物跡や柵列として断定できるものはなかったが、ピットのなかには、深く掘り込まれたものや柱の根固めに用いられたと考えられる礫や陶磁器が据え付けられているものがあることから建物跡の存在が推察され、貿易陶磁をはじめとする多量の遺物が出土していることから、日常的な居住が窺える。しかし、これらのピットはII期の範疇に納まるものであるが、各ピットがII-1期～II-3期のいずれの時期に帰属するのには判断できなかった。なお、頂部平坦面の北東側（第3次調査地）は、工事法面保護の関係で未調査であるため、その様相は窺い知れない。



第29図 第2次・第3次調査 II-2期の遺構分布図

一方、北東側斜面では、腰郭6と腰郭7はI期から継続して存在し、腰郭9は、腰郭8を埋め立てて北東側に拡張している。腰郭9は、位置的に明治2年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』の中段の腰郭に該当すると考えられ、本来はさらに北東へ大きく広がっているが、住宅団地造成工事により大きく削平され、幅1.3～3.5mしか残存していない。

3. II-2期

頂部平坦面では、北西側（第2次調査地）にピットが集中し、北東側（第3次調査地）は調査区の制約もあろうがピットの存在は希薄である。この傾向は続くII-3期にも認められる。

一方、北東側斜面では、腰郭9はI期～II-1期には地山を削り出したままで、整地を行わずに平坦面を構築していたが、当該期には、地山の上に10cm前後の盛土をして、整地を行い、掘立柱建物跡1棟、柵列1条、土坑1基、ピット35基が検出された。なお、第2次調査の腰郭7と腰郭9の平坦面で検出したピットは、既出の『石井要害跡II』の報告書ではI期に帰属するものとして報告していたが、第3次調査の結果、II-2期に帰属することが明らかとなった。掘立柱建物跡1は北東側が住宅団地造成工事によって削平されているが、桁行2間、梁行1間の建物と想定され、柱間距離が2.5mと広く、性格は不明であるが、大型の建物であったと考えられる。柵列3は、腰郭9と平行するように北西―南東方向にのびる。北西側は調査区外にのびる可能性があるが、検出した範囲では長さ6.5mを測る。柵列の中央には柱間距離が長い部分があり、この部分に出入口があったと推察される。I期～II-1期にかけて存在した腰郭7は、当該期になると、人為的に埋め立てられてしまうが、腰郭6は前代から継続して存在すると考えられる。また、柵列3の出入口部分が腰郭6の南東側の肩付近に位置することから、その関係性が示唆される。

腰郭9の平坦面で検出されたP28からは土師質土器の坏身と銭貨が26枚出土しており、地鎮的な性格が窺える。

4. II-3期

頂部平坦面においては、前代と大きな変化はないが、北東側斜面では腰郭6を版築状に埋め立てる過程で、段状遺構を3基構築しており、最下段の段状遺構3には集石がみられる。腰郭9の平坦面では、ピット等の遺構は検出されず、当該期には前代のような施設は存在しないものと考えられる。

続く16世紀後半に帰属する遺物が認められないことから、この時期には城主が不在、あるいは廃城となったと考えられる。

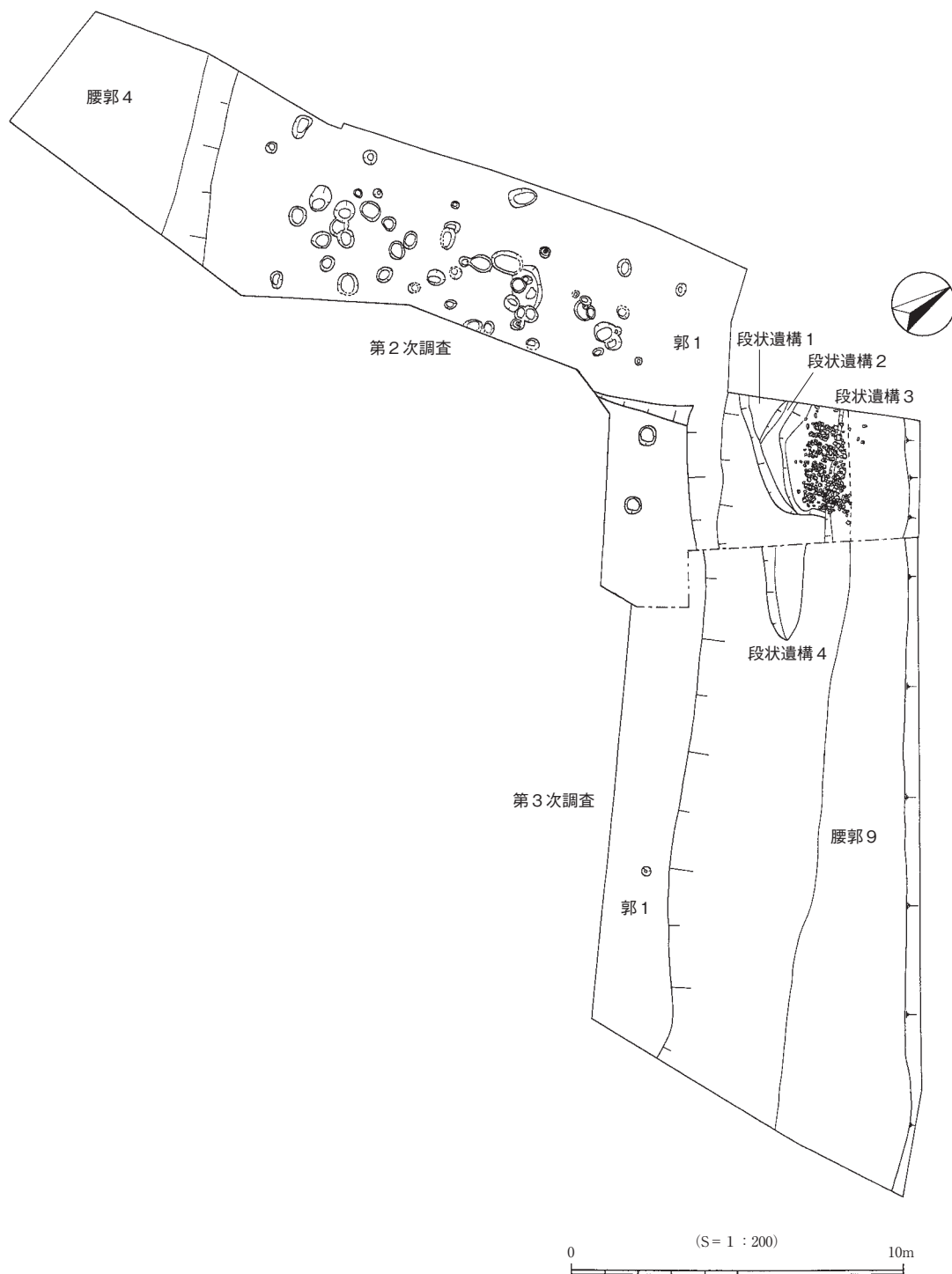
第2節 出土遺物について

石井要害跡第3次調査から出土した土器と陶磁器について、中世に帰属する破片点数をすべてカウントし、グラフ化した。また、調査地点による組成の違いを検討するために、第1次調査、第2次調査との比較を試みた。

第3次調査では、総出土点数551点のうち、土器が237点(43%)、瓦質土器が1点、国産陶器が228点(41%)、中国・朝鮮の陶磁器が85点(15%)であった。これに対して第1次調査では、土器が31%、国産陶器が53%、中国・朝鮮の陶磁器が15%、第2次調査では、土器が58%、国産陶器が31%、中国・朝鮮の陶磁器が11%であった。中国・朝鮮の陶磁器の割合は3地点ともほぼ同じであるが、第1次調査と第2次調査では、土器と国産陶器の割合が逆転している。これに対して、第3次調査では、土器と国産陶器の割合がほぼ同じであり、第1次調査と第2次調査の中間的な割合である。

土器については、土師質土器の坏・皿類が214点と最も多く、土器の出土点数237点のうち90%を占める。京都系の皿は、可能性のあるものも含めて14点しかなく、土器のなかでも6%しか存在しない。

第2次調査では、土師質土器の坏・皿類が95%と第3次調査とほぼ同じ割合であるが、第1次調査では、土師質土器の坏・皿類が76%と割合が低いのは、第1次調査では鍋・釜が17%を占めるのに対して、第2次調査では2%、第3次調査では3%しか出土しておらず、このことが反映されていると



第30図 第2次・第3次調査 II-3期の遺構分布図

考えられる。

土師質土器の坏・皿類を土器と陶磁器全体の割合からみてみると、第3次調査では39%で、第1次調査の24%、第2次調査の55%の中間的な割合を示している。

国産陶器は、総点数228点のうち備前焼が214点（94%）と最も多く、信楽や越前からの搬入品とみられる瓷器系陶器の壺・甕類は7点（3%）存在するのみである。備前焼は、第1次調査では89%、第2次調査では86%で、第3次調査ではその割合が高くなっている。これは、瓷器系陶器の割合が第1次調査では8%、第2次調査では9%と高くなっていることが反映されていると考えられる。さら

に、備前焼のみを器種別でみると、壺・甕類が94%を占めており、第1次調査の97%、第2次調査の96%とともに貯蔵具が大半を占めている。

貿易陶磁については、総点数85点のうち、青磁製品が43点（51%）を占め、第1次調査の40%、第2次調査の47%よりもやや高い割合を示す。このうち、碗では線描きの蓮弁文碗と無文の碗が主体となっている。

白磁はE群が主体で9点（11%）であり、第1次調査ではD・E群が主体で12%、第2次調査ではD群が主体で13%と3地点ともほぼ同じ割合を示す。

青花は碗・皿類を合わせて19点（22%）と比較的多く、B群の皿が主体とみられる。第1次調査、第2次調査ともB群の皿が主体で、第1次調査の16%、第2次調査の19%よりもやや高い割合を示す。

朝鮮陶磁器は7点（8%）で、第1次調査の24%、第2次調査の13%よりも割合が低くなっている。

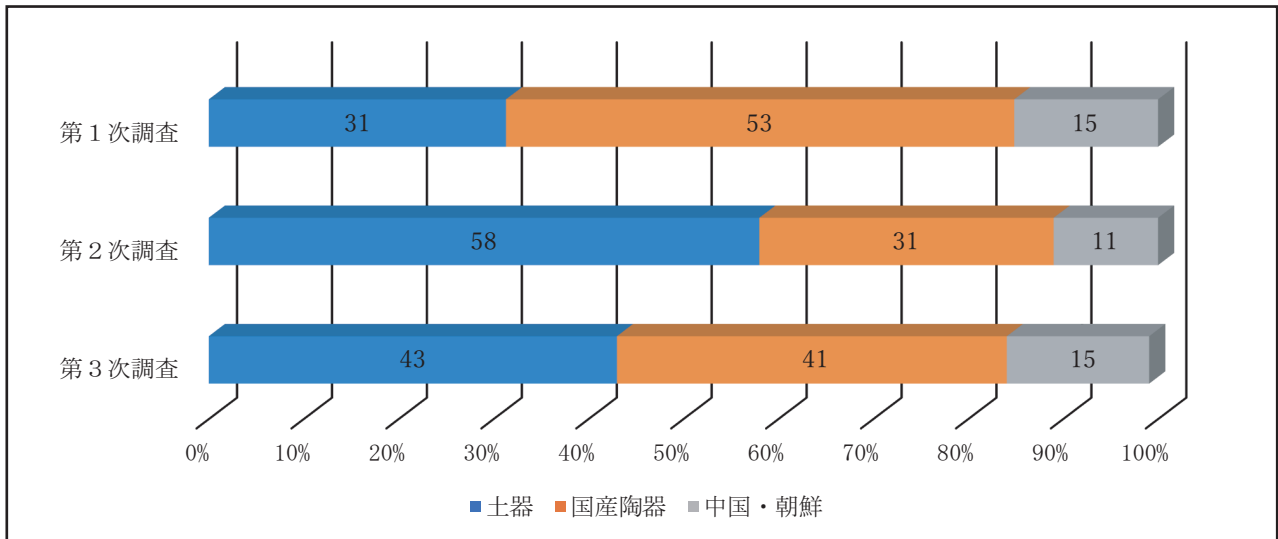
第1次～第3次調査の土器、陶磁器の組成は、貿易陶磁については大きな差異は認められなかったが、第1次調査と第2次調査では、土器と国産陶器の割合が逆転し、さらに、全体に占める土師質土器の坏・皿類の割合が大きく異なる。これに対して第3次調査では土器と国産陶器の割合がほぼ同じで、さらに、両器種とも第1次調査と第2次調査の中間的な割合を示す。第3次調査地は、第1次調査地と第2次調査地との間に位置し、このような調査地点による土器と国産陶器の割合の相違は、空間上の機能差を示しているとも考えられるが、第3次調査出土の土器と国産陶器は、第1次調査と第2次調査出土の土器と国産陶器の中間的な割合を示すことから、調査地点による漸移的な組成の推移を示している可能性もある。しかし、現時点で結論を導き出すのは避け、第1次調査地と第3次調査地との間に位置する第4次調査の結果を待つて検討することとしたい。

第3表 石井要害跡 第3次調査出土土器・陶磁器集計表

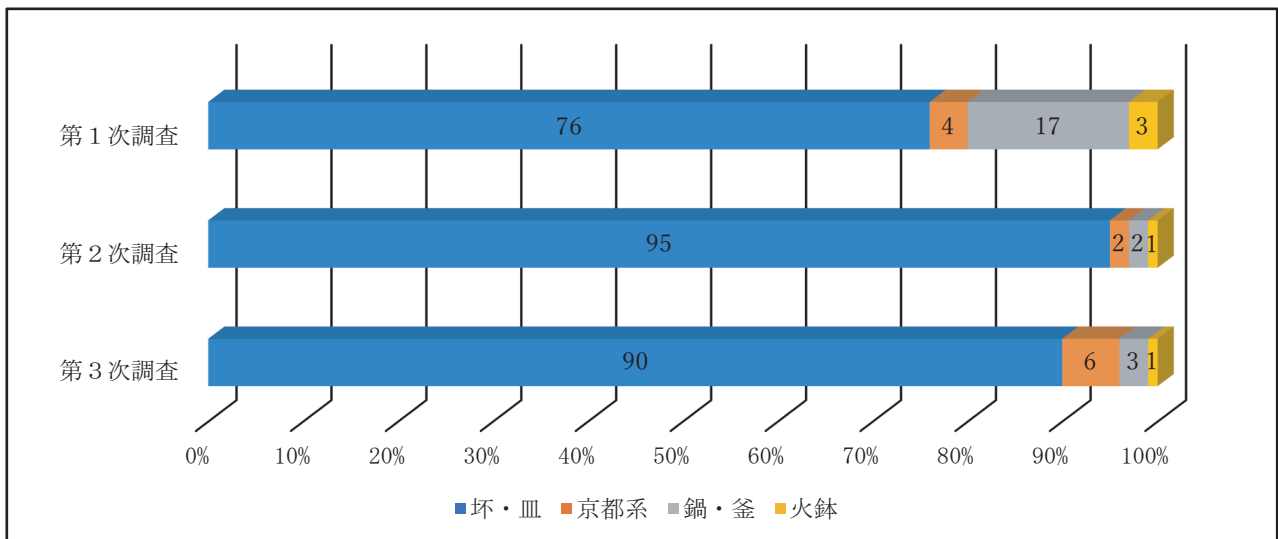
	土師器				瓦質土器	越前	瀬戸・美濃	備前										陶磁器系					青磁碗			青磁その他			白磁碗・皿		青花碗	青花皿・小杯			中国陶器			朝鮮		唐津	小計	備考	
	坏	鍋	火	その他				播	天	そ	播	壺	甕	壺	徳	水	信	壺	信	壺	B	C	D	E	不	稜	香	不	B	E	不	不	不	小	天	褐	そ	皿	壺	白			壺
合計	214	8	1	14	1	1	3	12	5	3	192	1	1	6	1	4	2	2	4	19	1	2	6	3	1	4	4	1	5	4	1	1	7	2	2	3	1	4	2	1	1	551	
類別合計	237				1	1	4	214					7	31					12			9		6	13			7			7		2	551									

参考文献

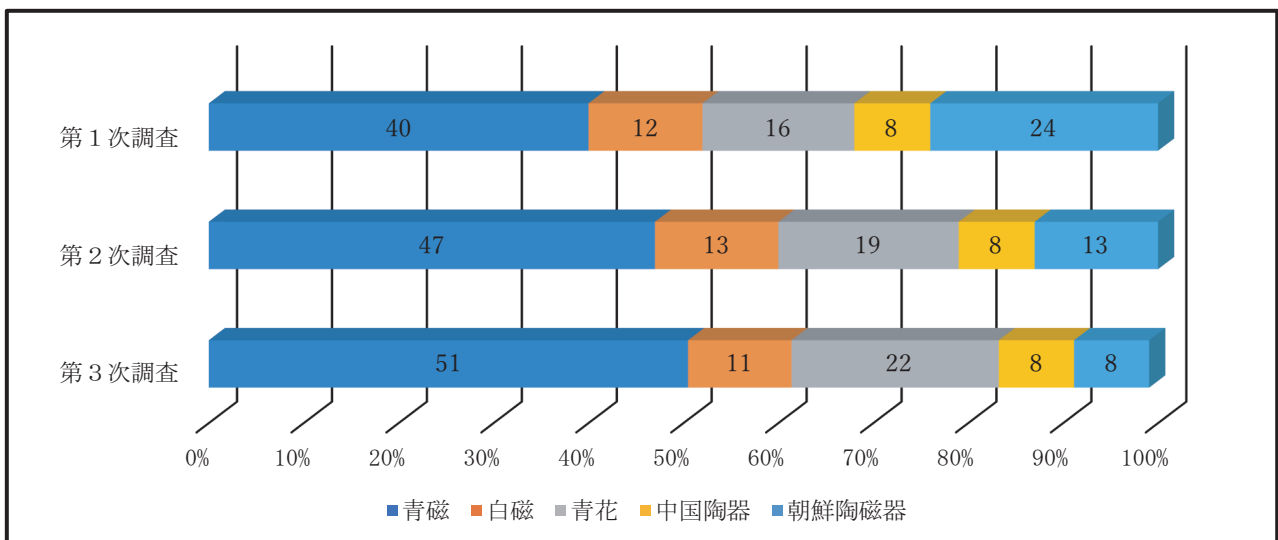
内藤 亮 1964「成実村の歴史をたずねて（四）石井要害跡」『旧成実村史』成実公民館
 内藤 亮ほか 1971「幻影石井城」『米子市石井要害土地区画整理事業記念誌』米子市石井要害土地区画整理組合
 亀尾八州雄 2002 『ふるさと歴史散歩2 石井要害』
 米子市編 2003 『新修米子市史』第一巻 米子市
 米子市編 1997 『新修米子市史』第十二巻 米子市
 高橋浩樹 2019 『石井要害跡Ⅰ』一般財団法人 米子市文化財団
 高橋浩樹 2019 『石井要害跡Ⅱ』一般財団法人 米子市文化財団



第31図 器種・産地別組成図



第32図 土器の器種別組成図



第33図 貿易陶磁の組成図

第4表 II-1期 腰郭9出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
1	9	土師質土器 坏身	※ 8.0	※ 5.0	2.1	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	P16出土
2	9	陶器壺	※15.0	—	△ 5.5	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、頸部ヨコナデ	密	良	赤灰色	備前焼 中世5a期 溝4出土

第5表 II-2期 腰郭9出土陶磁器・土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
3	12	青磁 稜花皿	※13.0	—	△ 1.3	内面：3重の圏線	密	良	オリーブ灰色	
4	12	青磁 盤	—	—	△ 2.5		密	良	淡緑色	
5	12	青磁 香炉	—	※ 7.8	△ 3.5	外面：2重の圏線	密	良	灰オリーブ色	
6	12	白磁 皿	※13.0	—	△ 1.3		密	良	灰白色	森田E群
7	12	青花 皿	—	※ 3.2	△ 1.5	外面：芭蕉葉文 内面：唐草文、見込み捻花文	密	良	灰白色	小野C群
8	12	青花 小坏	※ 6.2	—	△ 2.1	外面：1重圏線、唐草文 内面：1重圏線	密	良	青白色	
9	12	陶器 天目茶碗	※ 9.8	—	△ 5.4		密	良	黒色	中国産
10	12	陶器 甕	※33.4	—	△ 7.4	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、頸部ヨコナデ	密	良	赤褐色	備前焼 中世5b期
11	12	土師質土器 皿	※ 8.0	—	1.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	京都系
12	12	土師質土器 皿	※ 9.0	—	△ 1.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	京都系 P45出土
13	12	土師質土器 皿	※11.4	—	△ 2.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰黄褐色	京都系
14	12	土師質土器 皿	※16.6	※10.4	2.4	外面：回転ナデ、指押さえ 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	京都系 P34出土 内外面煤付着
15	12	土師質土器 坏身	※14.0	—	△ 2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	P25出土
16	12	土師質土器 坏身	—	※ 7.0	△ 3.3	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	P6出土
17	12	土師質土器 坏身	—	※ 5.2	△ 2.3	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	P23出土
18	12	火鉢	※30.0	—	△ 3.0	外面：5弁の花文のスタンプ文	密	良	浅黄橙色	
19	12	弥生土器 壺	—	—	△ 4.7	外面：8条の平行沈線 内面：摩滅のため調整	密	良	浅黄橙色	P44出土
20	12	須恵器 円面硯	残存長	残存幅	厚さ	外面：回転ナデ 内面：ナデ	密	良	青灰色	
			3.7	4.9	0.8					
21	12	土錘	長さ	直径	重量		密	良	浅黄橙色	
			4.9	2.3	27.5g					

第6表 II-2期 腰郭9出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
			長さ	幅	厚さ			
22	12	石鏃	2.4	2.0	0.7	2.3	黒曜石	

第7表 掘立柱建物跡1出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
23	13	陶器 搦鉢	※30.0	—	△4.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼 中世5a～5b期 P17出土

第8表 柵列3出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
24	14	陶器 壺	※15.0	—	△7.5	外面：回転ナデ、波状文 内面：回転ナデ	密	良	褐灰色	備前焼 中世5b期 P8出土

第9表 土坑5出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
25	15	青磁 碗	※11.8	—	△2.8	外面：線描きによる蓮弁文	密	良	オリーブ灰色	上田B5類

第10表 P28出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色 調	備 考
			口径	底径	器高					
26	17	土師質土器 坏身	※13.5	※7.2	2.6	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	

第11表 P28出土金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)		重量 (g)	銭 貨 名	初鑄年	備 考	
			直径	厚さ					
27	17	銭貨		2.4	0.1	2.2	咸平通寶	998	
28	17	銭貨	上面	2.4	0.1	3.8	景德通寶	1004	2枚固着
		銭貨	下面	2.1	0.1		不明		
29	17	銭貨	最上面	2.6	0.1	20.9	祥符通寶	1008	7枚固着
		銭貨	残6枚	2.3~2.5	各0.1		不明		
30	17	銭貨	上面	2.5	0.1	3.8	元祐通寶	1086	2枚固着
		銭貨	下面	2.5	0.1		天聖通寶	1023	
31	17	銭貨	上面	2.5	0.1	7.2	永樂通寶	1408	3枚固着
		銭貨	中	2.5	0.1		不明		
		銭貨	下面	2.4	0.1		皇宋通寶	1038	
32	17	銭貨		2.6	0.1	2.3	元豊通寶	1078	
33	17	銭貨	上面	2.5	0.15	4.8	永樂通寶	1408	2枚固着
		銭貨	下面	2.3	0.15		元豊通寶	1078	

34	17	錢貨		2.4	0.1	2.6	紹聖通寶	1094	
35	17	錢貨	上面	2.5	0.1	9.0	聖宋通寶	1101	3枚固着
		錢貨	中	2.4	0.1		不明		
		錢貨	下面	2.5	0.1		永樂通寶か	1408	
36	17	錢貨		2.5	0.1	1.8	永樂通寶	1408	
37	17	錢貨	上面	2.5	0.15	6.8	不明		2枚固着、裏面同士で固着
			下面	2.4	0.15		不明		

第12表 II-3期 郭1出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高					
38	20	粉青沙器皿	—	※4.0	△1.5	外面：高台砂目 内面：見込み砂目	密	良	灰色	朝鮮半島産
39	20	陶器播鉢	※32.0	—	△6.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、10条1単位の播り目	密	良	赤褐色	備前焼 中世5a期

第13表 II-3期 腰郭9出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高					
40	21	白磁皿	—	※5.0	△2.2	外面：高台内露胎	密	良	白褐色	朝鮮半島産
41	21	土師質土器皿	※9.0	※4.0	1.5	外面：ナデ 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	京都系

第14表 II-3期 切岸出土陶磁器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高					
42	23	須恵器坏身	※12.0	4.8	4.0	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良	灰色	
43	23	青磁碗	※11.8	—	△2.9	外面：線描きによる蓮弁文	密	良	オリーブ灰色	上田B5類
44	23	青磁碗	※15.2	—	△5.3	外面：線描きによる蓮弁文	密	良	オリーブ灰色	上田B5類
45	23	青磁碗	※11.8	—	△3.6	外面：雷文帯	密	良	オリーブ灰色	上田C2類
46	23	青磁碗	—	※5.0	△3.9	外面：高台内露胎	密	良	オリーブ灰色	上田D類
47	23	青磁香炉	—	※3.4	△1.3	外面：削り出し高台、高台内露胎 内面：露胎	密	良	オリーブ灰色	
48	23	陶器壺	※25.2	—	△8.6	外面：回転ナデ、刺突文 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	外面煤付着
49	23	陶器播鉢	※29.8	※9.0	△12.8	外面：回転ナデ、指押さえ 内面：回転ナデ、12条1単位の播り目	密	良	灰褐色	越前焼
50	23	土師質土器坏身	※13.2	7.4	4.1	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	

第15表 II-3期 切岸出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
			残存長	幅	厚さ			
51	23	砥石	7.6	6.2	1.7	111.7	細粒花崗岩	

第16表 Ⅲ期遺構外出土陶磁器・土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
52	26	B2 2層	青磁 碗	—	—	△4.0	外面：線描きによる蓮弁文	密	良	オリーブ灰色	上田B5類
53	26	B2 2層	青磁 盤	—	7.4	△1.7	内面：高台内露胎、ナデ	密	良	オリーブ灰色	
54	26	C2 2層	陶器 天目茶碗	※9.8	—	△2.5		密	良	黒色	中国産
55	26	D2 2層	陶器 皿	9.2	3.5	2.1	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部回転糸切り 内面：回転ナデ、見込み円形の砂目	密	良	赤褐色	外面煤付着
56	26	A2 2層	土師質土器 坏身	※7.4	4.2	1.3	外面：口縁部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	内外面煤付着

第17表 Ⅲ期遺構外出土金属製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別	法量 (cm)			重 量 (g)	材 質	備 考
				長さ	直径				
57	26	B2 2層	煙管 吸い口	7.1	1.2		14.5	銅	

第18表 Ⅲ期遺構外出土瓦観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				長さ	幅	瓦当部径					
58	26	B2 2層	中付巴瓦	30.9	13.3	12.6	外面・瓦当部：施釉 瓦当部：右三ツ巴文、9つの珠文	密	良好	黒色	

写真図版



調査地全体 調査前状況（南西から）



調査地全体 調査前状況（北西から）



頂部平坦面 調査前状況（北西から）



斜面中腹平坦地 調査前状況（北西から）



北東側斜面 調査前状況（北東から）



調査位置全景（上が北西）



調査地全景（上が南西）



調査地全景（北西から）



調査地全景（北東から）



調査地全景（南東から）



頂部平坦面土層



斜面部土層



斜面中腹平坦地土層



腰郭8 (南東から)



Ⅱ-1 期の遺構全景（北西から） ※Ⅱ-2 期の遺構も含む



Ⅱ-1 期の遺構全景（南東から） ※Ⅱ-2 期の遺構も含む



II-1期 腰郭9 (北西から) ※II-2期の遺構も含む



II-1期 腰郭9 (南東から) ※II-2期の遺構も含む



Ⅱ-2期の遺構面検出状況（北西から）

※遺構検出前



Ⅱ-2期の遺構面検出状況（南東から）

※遺構検出前



II-2期 郭1 (北西から)

※遺構検出前



II-2期 郭1 (南東から)

※遺構検出前



Ⅱ-2期 腰郭9平坦面検出状況（北西から）

※遺構検出前



Ⅱ-2期 腰郭9平坦面検出状況（南東から）

※遺構検出前



Ⅱ-2期 土坑5（北東から）



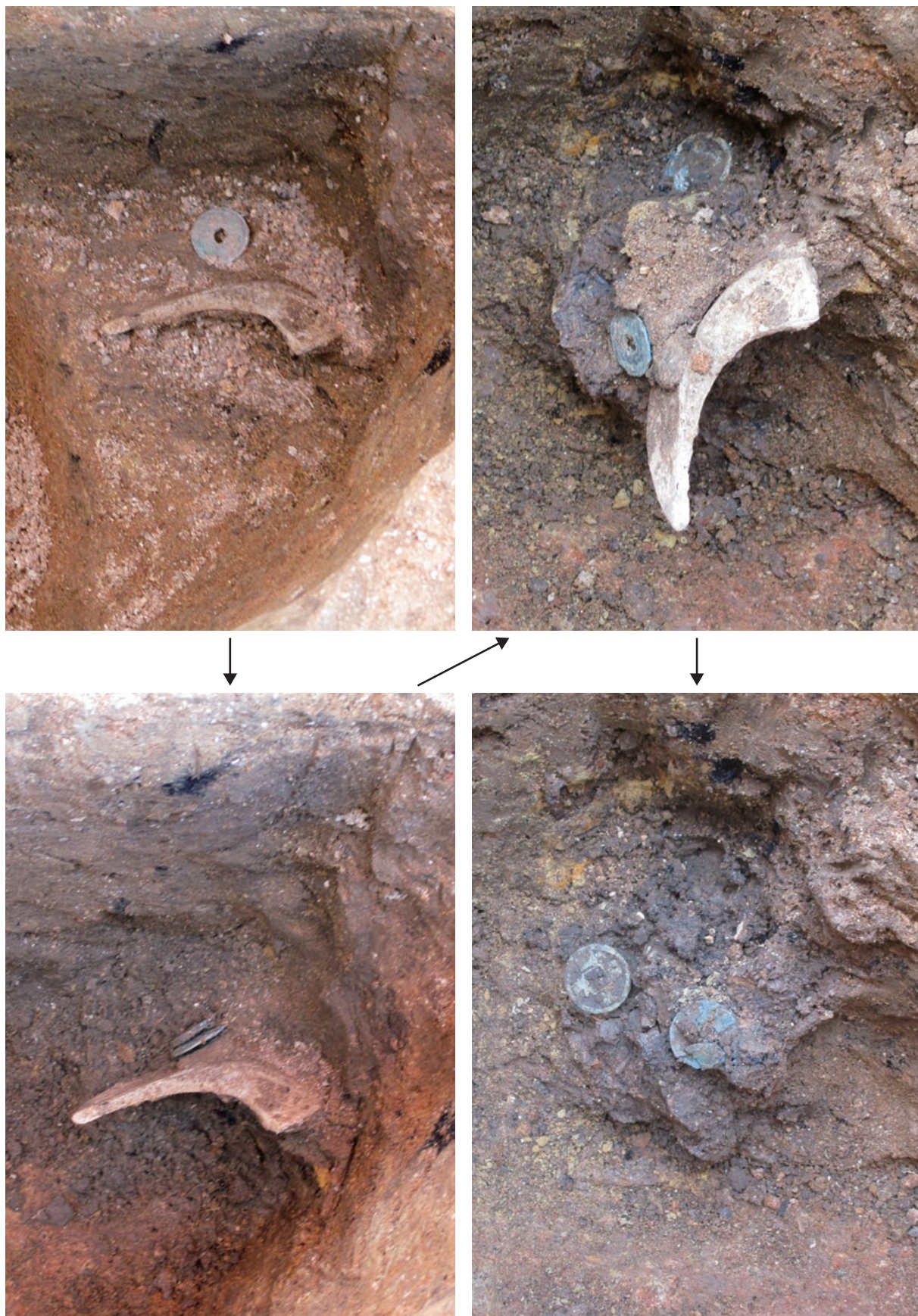
Ⅱ-2期 掘立柱建物跡1（南西から）



Ⅱ-2期 柵列3 (北西から)



Ⅱ-2期 柵列3 (南西から)



II-2 期 P28內遺物出土狀況推移



Ⅱ-3期の遺構全景（北西から）



Ⅱ-3期の遺構全景（南東から）



II-3期 郭1 (北西から)



II-3期 郭1 (南東から)



Ⅱ-3期 腰郭9 (北西から)



Ⅱ-3期 腰郭9 (南東から)



Ⅱ-3期 段状遺構4 (北東から)



Ⅱ-3期 段状遺構4 (南東から)



Ⅲ期の遺構全景（北西から）



Ⅲ期の遺構全景（南東から）



Ⅲ期 頂部平坦面（北西から）



Ⅲ期 頂部平坦面（南東から）



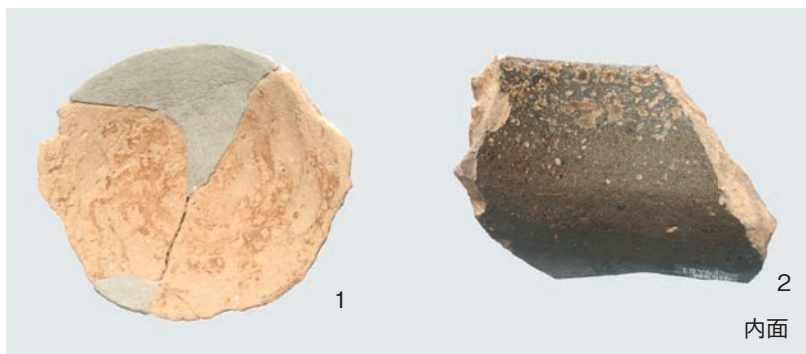
Ⅲ期 溝3 (南東から)



調査風景



2
外面



2
内面

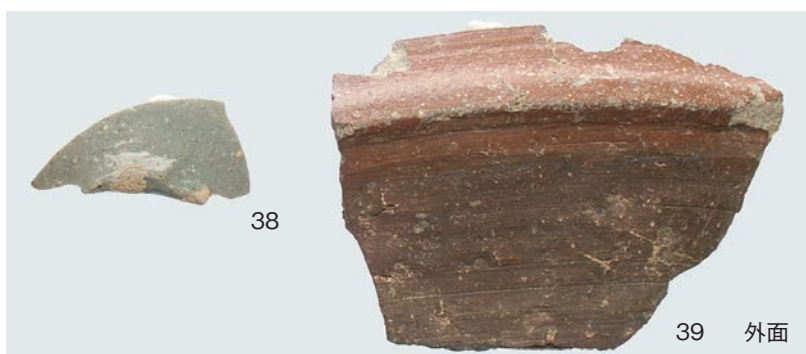
II-1期 腰郭9出土遺物

(S=1:2)



II-2期 腰郭9出土土器・土製品

(S=1:2)



39 外面



39 内面

II-3期 郭1出土遺物

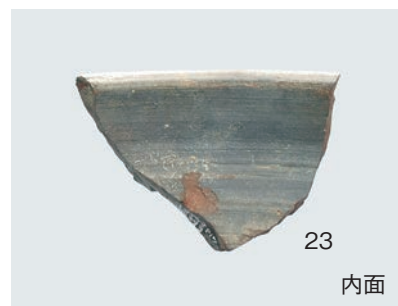
(S=1:2)



II-2期 腰郭9出土石器
(S=1:1)



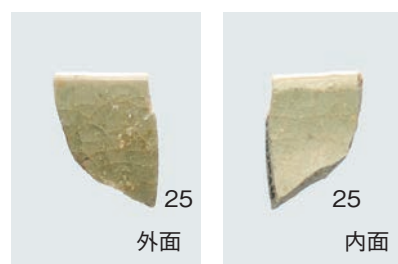
23
外面



23
内面

掘立柱建物跡1出土遺物

(S=1:2)



25
外面

25
内面

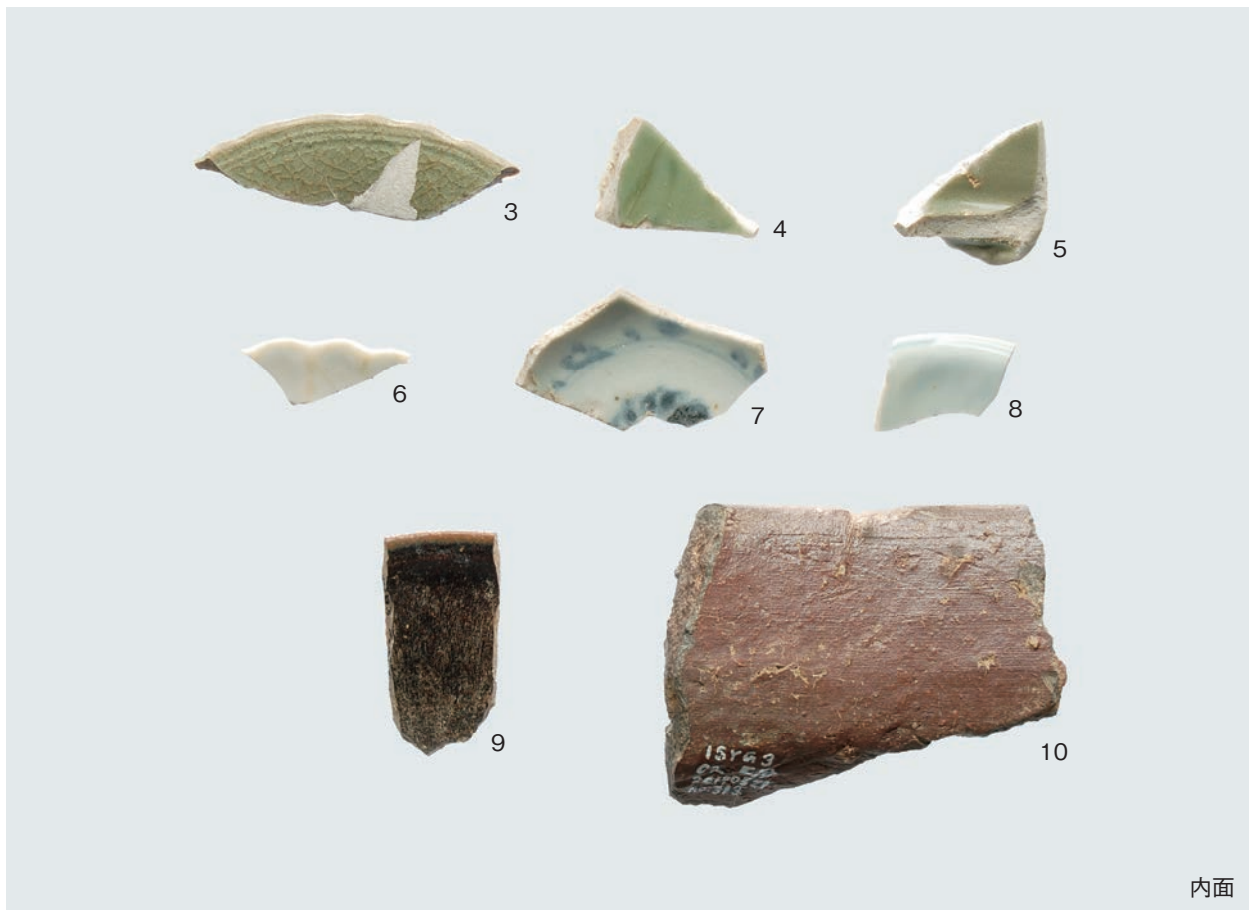
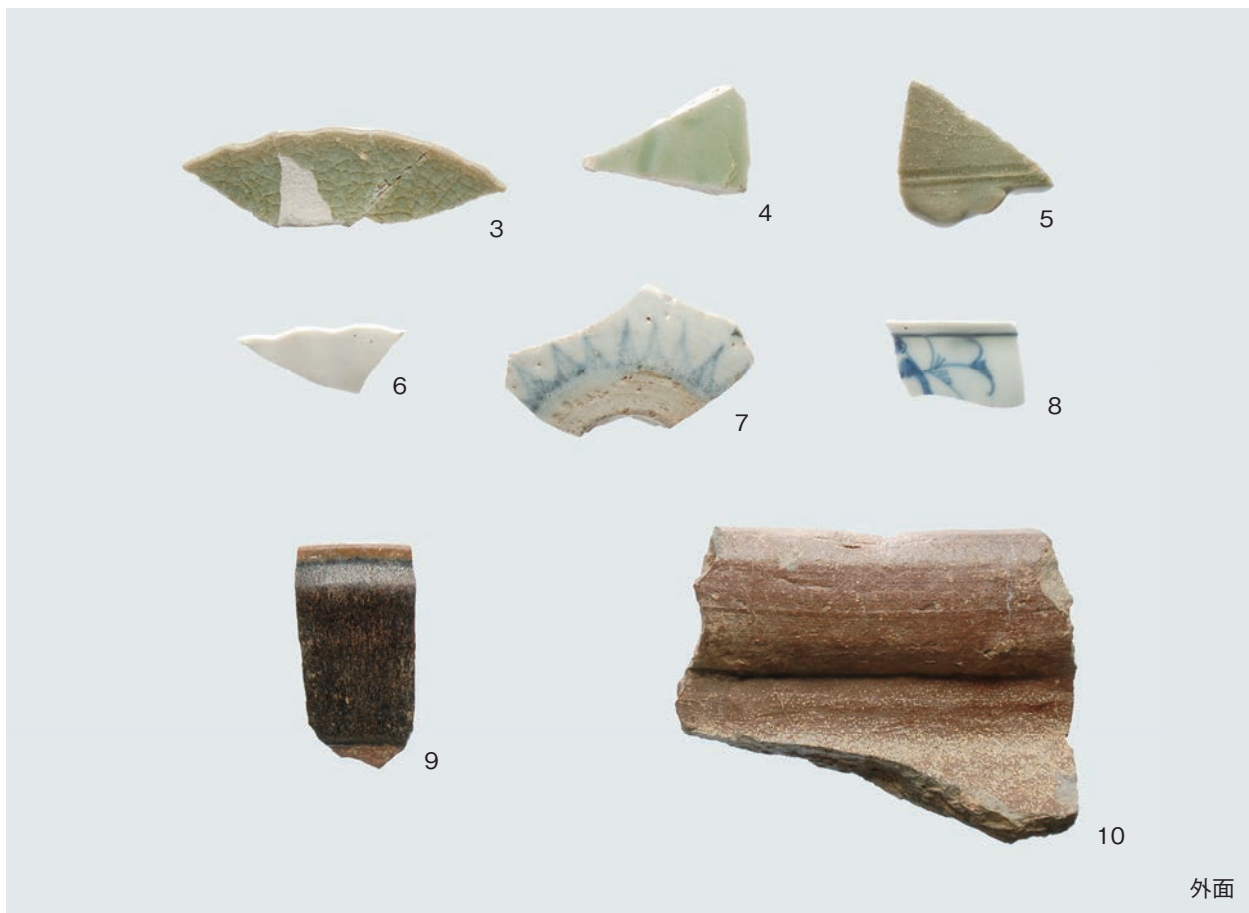
土坑5出土遺物 (S=1:1)



57

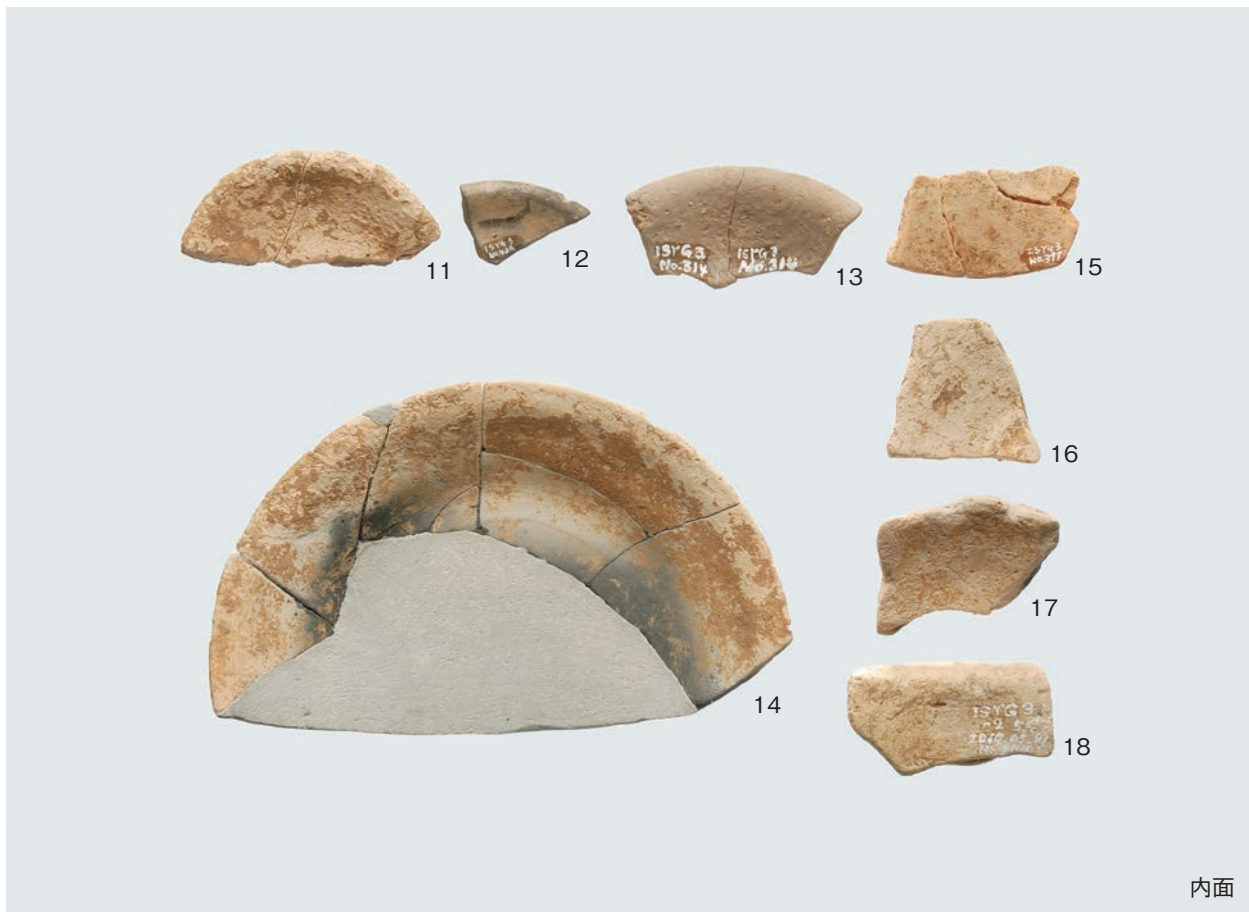
III期 遺構外出土金属製品

(S=1:2)



II-2期 腰郭9出土遺物(1)

(S=1:2)



II-2期 腰郭9出土遺物(2)

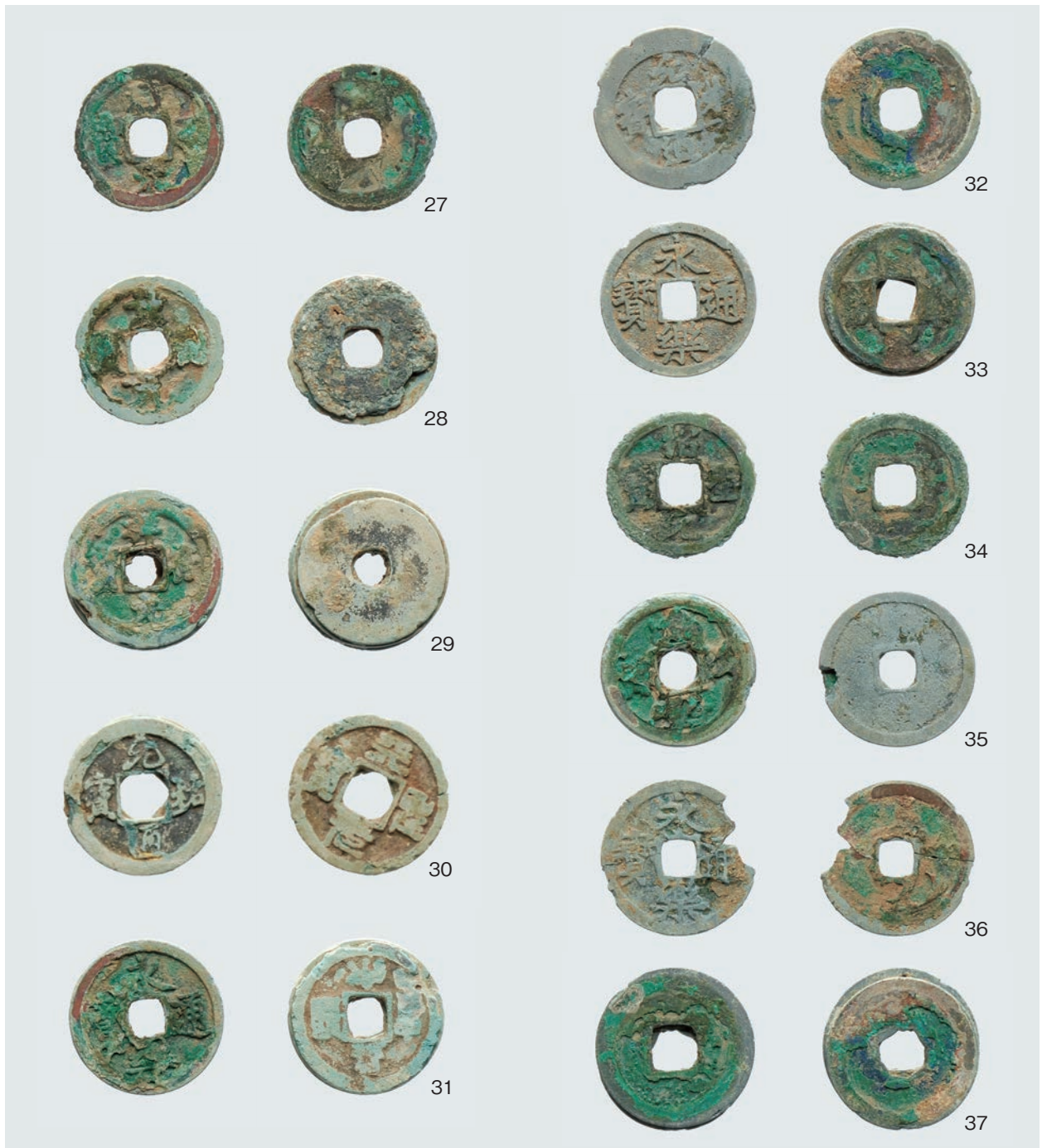
(S=1:2)

図版26



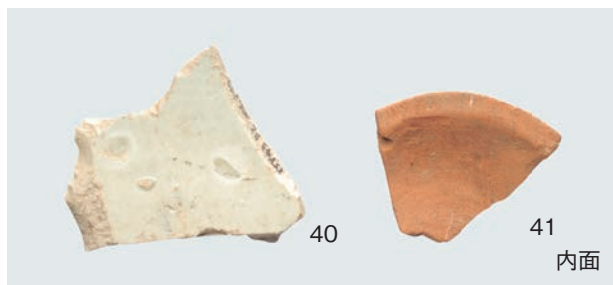
P28出土土器

(S = 1 : 2)



P28出土金属製品

(S = 1 : 1)

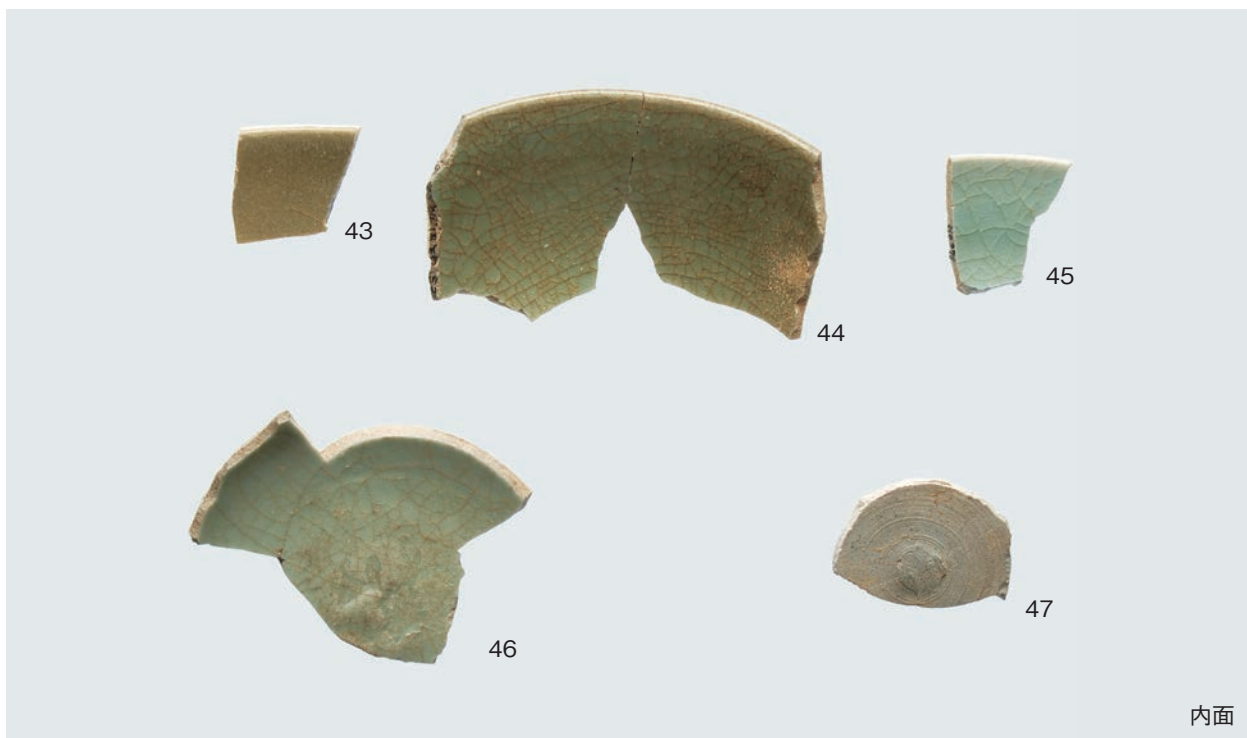


II-3期 腰郭9出土遺物

(S = 1 : 2)



外面



内面

II-3期 切岸出土遺物 (1)

(S = 1 : 2)





柵列3出土遺物

(S = 1 : 2)



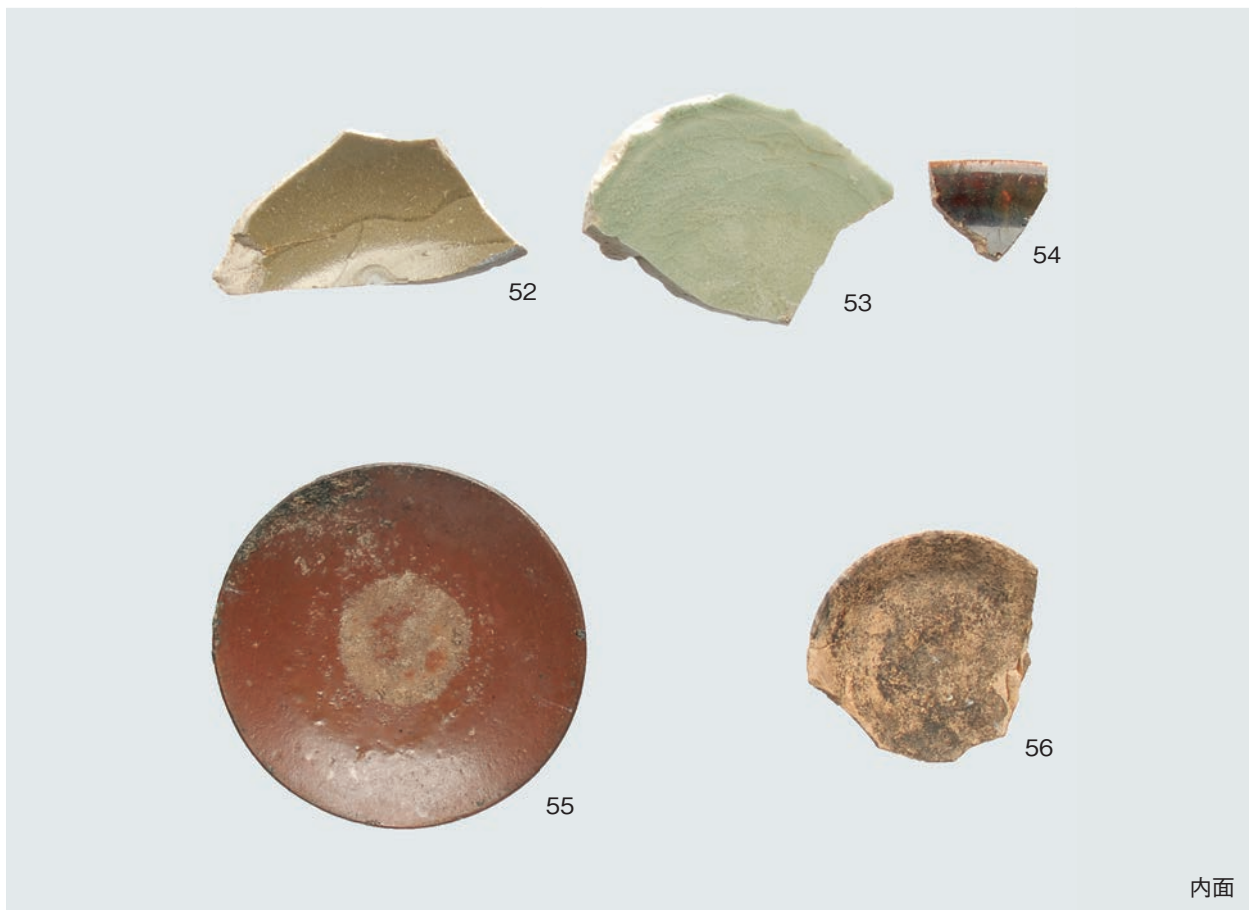
Ⅱ-3期 切岸出土石製品

(S = 1 : 2)



Ⅲ期 遺構外出土瓦

(S = 1 : 2)



報告書抄録

ふりがな	いししようがいあとさん							
書名	石井要害跡Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	18							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2020年3月26日 令和2年3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石井要害跡	鳥取県 米子市 石井	31202	米子市 156	35度 24分 18秒	133度 20分 50秒	2019年 4月8日) 2019年 6月5日	542.8㎡	急傾斜地 対策工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石井要害跡	城館	中世	郭、腰郭、掘立柱建物跡、 柵列、段状遺構、土坑、 溝状遺構		弥生土器、須恵器、青磁、白磁、青花、褐釉陶器、朝鮮産陶磁器、国産陶磁器（越前、信楽、備前、瀬戸・美濃、唐津、伊万里）、土師質土器、石製品、金属製品			
要 約								
<p>石井要害跡は、米子市西部に位置し、加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地する。今回の調査は、出丸と称される丘陵の頂部平坦面の北東側とその北東側斜面の調査を実施した。既往の調査ではⅠ期～Ⅲ期の3時期に時期区分されていたが、今回の調査では、5面の遺構面を確認しており、従来のⅡ期がⅡ-1期～Ⅱ-3期に細分され、全体として5時期に時期区分されると考えられる。</p> <p>Ⅰ期（15世紀後半）には、北東側斜面では頂部平坦面よりも4m下がった位置に腰郭7、9の2郭を構築し、さらにその北東側にも腰郭8を構築している。</p> <p>Ⅱ期（16世紀前半～中頃）には、Ⅱ-1期～Ⅱ-3期の3時期に細分されるが、各時期がどれくらいの時期幅を有するかは不明である。Ⅱ-1期には北東側斜面では腰郭8を埋め立てて、腰郭9を北東へ拡張している。Ⅱ-2期になると、腰郭7は人為的に埋め立てられ、腰郭9の平坦面では掘立柱建物跡1棟、柵列1条が検出された。Ⅱ-3期には段状遺構1基を検出した。第2次調査では、腰郭を版築状に埋め立てる過程で上下に連続する3段の段状遺構を構築しており、その関係が窺える。続く16世紀後半は遺物が出土していないことから、城主が不在、あるいは廃城となったと考えられる。</p> <p>Ⅲ期には、北東側斜面の平坦地は畑地化されたと考えられ、その排水用と考えられる現代の溝状遺構を検出した。</p>								

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書18

鳥取県米子市

石井要害跡Ⅲ

2020年3月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印刷 勝美印刷株式会社